本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、学校法人西野学園が実施した令和6年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。

文部科学省委託事業
令和6年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証

地域活性化のための農福連携人材育成事業

成果報告書

令和７年３月

学校法人西野学園

札幌心療福祉専門学校

目次

第 1 章　事業の概要
　第 1 節　　事業名
　第 2 節　　事業の概要
　第 3 節　　事業の実施期間
　第 4 節　　事業の推進体制

第 2 章　実施概要
　第 1 節　　実施経緯
　第 2 節　　実施体制図
　第 3 節　　会議議事録
　　第 1 項　　コンソーシアム会議
　　第 2 項　　カリキュラム会議

第 3 章　今年度の事業及び教育プログラムの内容
　第 1 節　　北海道余市紅志高等学校との連携（令和6年度）
　　第 1 項　　連携内容
　　第 2 項　　成果
　第 2 節　　札幌圏域の高等学校等との連携（令和6年度）
　　第 1 項　　連携内容
　　第 2 項　　成果
　第3節　　教育プログラムの開発
　　第 1 項　　実証講座の内容
　　第 2 項　　フィールドワークⅠ（実習）の内容
　　第 3 項　　京丸園視察
　　第 4 項　　成果

第 4 章　全体の振り返り（時系列に記載）
　会議（ヒアリングなど）

第 5 章　　まとめ

第1章　事業の概要

第1節　　事業名

令和6年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証

「地域活性化のための農福連携人材育成事業」

第２節　　事業の概要

・名称

『地域活性化のための農福連携人材育成事業』

・内容

(1)開発する高・専一貫の教育プログラムの全体像

社会福祉士と精神保健福祉士の養成校である本校では、近年多くの地方自治体で取り組みが進んでいる「農福連携事業」を学ぶことで障がい者や高齢者に対して、農業の知識を身に付けたソーシャルワーカーが相談業務を行うとともに農業作業のアドバイスをすることができる人材を育成することを目指している。その目的を達成するために、高校生の段階から、ソーシャルスキルや社会人基礎力を養い、福祉の基礎的な知識や考え方に少しずつ触れながら、専門学校へ進学後に現場での実習経験を積み、社会福祉主事や社会福祉士の資格取得を余裕のあるカリキュラムで目指す教育プログラムを構築する。この高専一貫プログラムで、進学後のミスマッチを避け、中途で退学する学生の減少にもつなげ、農福連携に取り組む地方自治体に就労することにより、若者の地域への定着と地域の活性化を図ることを目的にしている。

(2)新たな教育プログラムを開発する理由

新たな教育プログラムを開発する背景としては、以下の点が挙げられる。

①学習習慣を身に付ける環境がなかった学生がいる。

②それまでの学校生活が合わず、いわゆる「不登校経験」を持つ学生がいる。

③「社会的貢献ができる仕事に就きたい」という気持ちが強い。

④精神疾患や発達障害の診断を受けている学生がいる。

⑤他者とのコミュニケーション等に悩み、卒業後、国家試験受験に必要な実務経験１年を積むのに苦労する学生がいる。

⑥遠方からの入学者の内、地元に戻って就労する学生が少ない。

⑦専門学校が地域社会に関わる機会がこれまでの実践では少なかった。

⑧特別支援学校高等部を卒業した生徒の進学先が求められている。

様々な背景を持つ学生に対し、専任教員は教員自身のソーシャルワーカーという専門性を生かし、学生が卒業し就労していけるよう努力している。しかし、専門学校 3 年間だけで対応することは学生にとっても負担になっており、中途退学者や資格取得できない者もおり、現時点でも各学年 2 名ほどの休学者が存在している。これらの課題解決のためには、高等学校・特別支援学校・行政・企業の連携協力が必要である。

(3)開発する教育プログラムがどのような点で課題を解決することが可能であるのか。

上記のこれまでの教育内容では対応できない課題を次の 3 つに分類することができる。

A:地域活性化に取り組む高校との連携(①、②、③、⑥、⑦)

・農業実習を行う連携農園がある余市町唯一の公立高校と連携する。
〔北海道余市紅志高等学校(全日制総合学科)〕

・地元の余市町にもコンソーシアムに参加していただき、高専民公で地域活性化を目指す教育課程と企画を実行していく。

B:不登校・発達障がいに積極的に取り組んでいる高校との連携(①、②、③、④、⑤)

・本校に進学実績があり、農福連携ソーシャルワークコースへの入学希望者がいる。
〔市立札幌大通高等学校(定時制・午前午後夜の 3 部制)〕

・通級指導教室がある札幌市唯一の高校における専門学校教員による早期からの授業参加

C:高等支援学校との連携(①、②、③、④、⑤、⑧)

・高等支援学校には、発達に偏りがあるものの知的には高い生徒も在籍している。
〔北海道札幌あいの里高等支援学校 〕

これらの学校と高専一貫カリキュラムで連携することで、早い段階から SST(ソーシャルスキルトレーニング)や社会人基礎力の育成ができ、高専 6 年間または 7 年間の一貫教育で持続可能な社会に貢献する人材を育てることができる。

第 3 節　事業の実施期間

令和6年5月24日から令和7年 3 月 1 日まで

第 4 節　事業の推進体制

本事業の推進体制につきまして、四者によるコンソーシアムの構築と高等学校の連携協力校、行政機関の支援協力、企業の連携協力を含め 16 箇所との推進体制を整えた。

構成機関及び構成員

(1) 高等学校

名称		役割等	都道府県名
1	北海道余市紅志高等学校	コンソーシアム参加	北海道
2	市立札幌大通高等学校	コンソーシアム参加	北海道
3	北海道余市養護学校	連携協力校	北海道
4	市立札幌豊明高等支援学校	連携協力校	北海道
5	市立札幌みなみの杜高等支援学校	連携協力校	北海道
6	北海道札幌あいの里高等支援学校	連携協力校	北海道

(2) 行政機関

名称		役割等	都道府県名
1	北海道余市町	コンソーシアム参加	北海道
2	北海道教育庁高校教育課	コンソーシアム参加	北海道
3	北海道総務部学事課	支援協力	北海道
4	北海道農政部農業経営課	支援協力	北海道

(3) 専門学校

名称		役割等	都道府県名
1	学校法人西野学園　札幌心療福祉専門学校	コンソーシアム参加 プロジェクト代表校	北海道

(4) 企業

名称		役割等	都道府県名
1	特定非営利活動法人どりーむ・わーくす （就労継続支援B型事業所/水尻農園）	コンソーシアム参加	北海道
2	株式会社ネクストリソース	コンソーシアム参加	北海道
3	株式会社 dispo.（就労継続支援 B 型事業所）	コンソーシアム参加	北海道
4	カゴメ株式会社　東京本社	コンソーシアム参加	東京都

5	竹内農園	連携協力	北海道
6	吉岡農園	連携協力	北海道

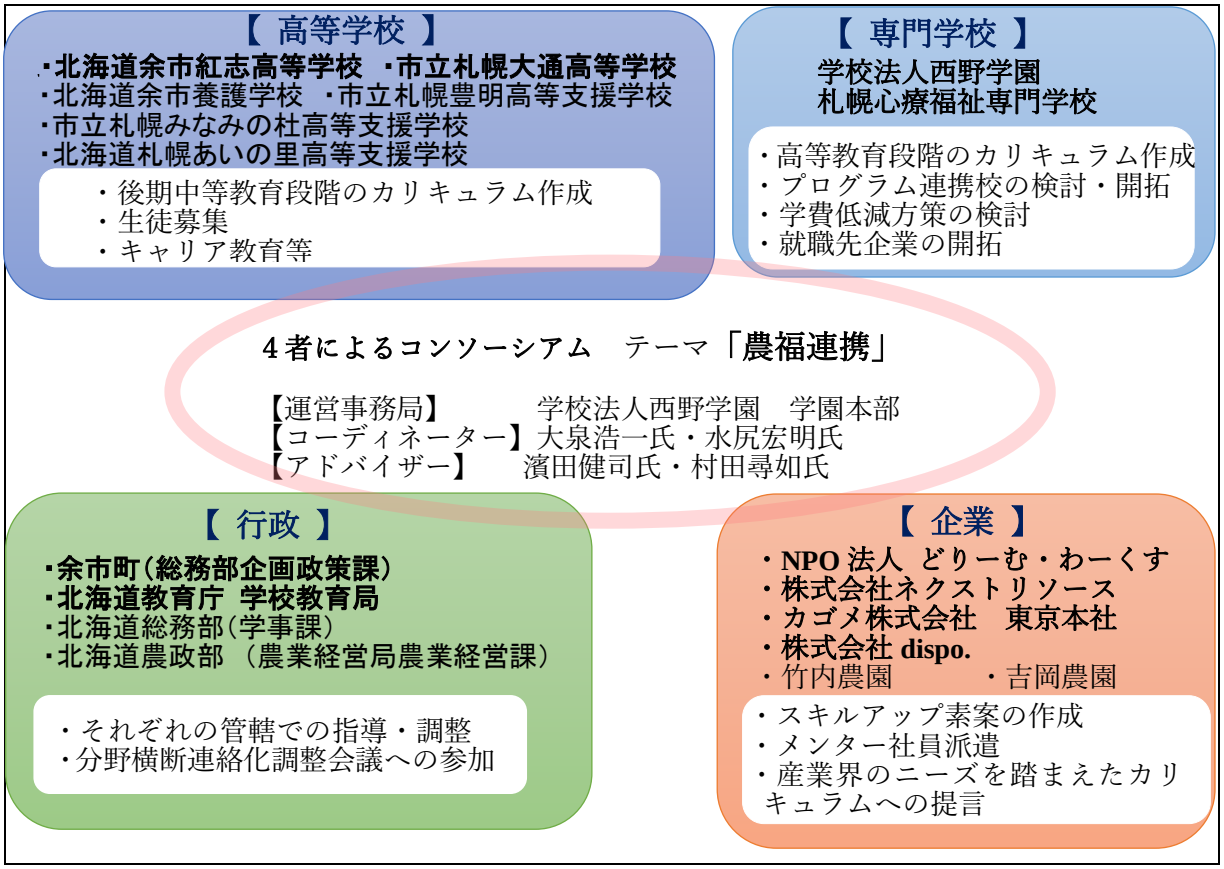
第２章　実施概要

第１節　実施経緯

・本事業では、令和6年5月～令和7年2月までに「コンソーシアム会議」「カリキュラム会議」を含む、関係機関との会議及び打ち合わせを行い、当該事業の目標達成のための体制整備や、具体的なプログラム開発を行った。

・「就業人口減少・高齢化」という課題を抱える農業界と、障がい者や高齢者の社会貢献の場の創出という課題を抱える福祉業界が連携することで、両業界の課題を解決するとともに、そのことによって地域の活性化を目指す取り組みである「農福連携」が国や各地方自治体等によって推進されているが、両業界が互いのことを知らないことで両者のマッチングが難しい現状にある。そのことから両業界の橋渡しができるコーディネーターの役割を担える人材の育成が求められており、福祉専門職養成校の立場から、「農福連携の知識や技術を持った」福祉専門職の育成を目指すための体制づくり、カリキュラム開発を行った。来年度以降も、より多くの農業関連団体や福祉関連団体、行政等を協力機関として迎え、より実効性の高いカリキュラム開発を行っていく予定。

第２節　実施体制図



第 3 節　会議議事録

第1項　コンソーシアム会議

第 1 回コンソーシアム会議　議事録

日　時:令和6年7月 22 日(月)13:00～14:30

場　所:学校法人西野学園　札幌医学技術福祉歯科専門学校　2Fコミュニティルーム

司会進行:　長井豊貴(学校法人西野学園)

出席者:対面 17 名、web4 名、計 21 名(詳細別紙)

1.理事長あいさつ

前鼻英蔵(学校法人西野学園)

2.令和6年度の活動予定について

(1)連携授業について

1)余市紅志高校との連携について

佐藤誉匡(精神保健福祉科)

2)札幌圏域高校等との連携について

幡　直人(精神保健福祉科)

(2)農福連携ソーシャルワークコースのカリキュラムについて

1)農福連携の実際Ⅰ

飯島英幸(精神保健福祉科)

2)フィールドワークⅠ

酒井　啓　(精神保健福祉科)

上記、(1)(2)について別紙資料①②③④を基に各担当者より説明がなされた.

札幌圏域高校との連携授業について、北海道農政部から修了証が渡されるとのことだが、農林水産省の技術者養成事業と関連あるか、また指定の高校生と専門学校生のみ対象となるかの問いがなされ、(農水省)農福連携技術支援者養成研修とは違い、北海道独自の取り組みで農福連携入門講座を開催しており、一般参加者も複数いるとの回答があった。また、北海道農政部より北海道の事業との共催という形で実施している。との回答があった。

入門講座という観点は「農福連携を広く知ってもらう機会」は大変重要であるとの意見あり。

北海道農政部より、本来は道が主導してやらなければならないところだが、西野学園で既に取り組んでいるところから共催という形をとり、協力いただいた。との追加説明あり。

3.参加団体から(敬称略)

…コンソーシアム会議参加団体から

▹生田氏(余市紅志高等学校)

それぞれのカリキュラムある中、各校での指導する教員の経験蓄積が課題。生徒は毎年初めて、教員だけが経験を蓄積させ対応できると考える。取り組みが単発で終わらないためにも積み重ねが重要である。また、福祉の観点では当地域で該当するのは多数が高齢者である。一年間を通して高齢者との接触は、高校生にとって生涯社会との接点(社会課題を知る事、その課題解決に参加する事、やってみる行動する事)となっている。今後も高校教員の地域課題への意識を高め、地域に教員が残る、そして生徒も残るように努力したい。

▹前田氏(市立札幌大通高等学校)

前回ご紹介した「大人は怖くない」とレポートしてくれた生徒の続報レポートを紹介させていただく。

「今までと比べ、楽しめるようになった、心に余裕を

持って考え、動くことができるようになったと気づいた。また、今までは農福連携という言葉だけ聞いて社会の役に立てていいじゃんとだけ考えていたが、実はそれって、そこまでになるにはとても大変難しい事だと感じる事ができた。そして自分は支援と施しを混同していたかもしれない。やってあげる事ではなく当事者のできないことを支える一緒に考える事だと理解できた。」との事だった。
また、一般の参加者、大人をみていて、自分の仕事の課題にどう生かすかと捉え、思考している大人から大人のすごさを感じたとの感想もあった。
この授業は本当に生徒の生の学びの場になっていると感じる。

▹滝田氏（北海道教育庁学校教育局）
教育活動の目標に対しての評価は、何を身につけて何をできるようになったかである。指導者側が評価として数値化以外に生徒自身がどう受け止めたか等についてはレポートなどの方法もある。また、目標設定以外に意図しなった成果を得る場合もある。意図しない成果は次回の目標に繋がるものとなり、今回の試みはそれに相当すると考える。

▹三上氏（株式会社 dispo.）
弊社に実習に来る学生を見ていて、その感性の良さに感動する。貴学の学生はフィールワークコースを履修している経験から、他校学生に比べ農業に関するハードルがとても低く、就労支援の場の一つとしてしっかりと受け止めてくれている。それは他学校の学生と比べ、差別化が図られていて頼もしい存在である。

…コーディネーターから
▹水尻氏（コーディネーター）
これまでの 3 年間で色々なことが見えてきたし、これからやっていくことが見えてきた。当初の目標に近づいてきたと感じる。3 年目を終え、出口として何を成すか、卒業生のキャリアを作る。①どのような職場でどのような仕事なのか、更に②ネットワーク作りが重要と考える。昨今の日本産業経済新聞の論説では、農福連携に学生を参加させるべく農福学連携協議会が発足したとの記事があった。これから卒業生が輩出され、北海道の中で農福連携に関わることができる人材を輩出できればと考える。
▹大泉氏（コーディネーター）
札幌連携授業では北海道の支援があり、一般の社会人、大学生も含め間口が広がった。授業していく中でもう一捻り工夫が必要と感じている。1 期ではコミュニケーション、2 期では流通・販売、3 期では農福商工連携（6 次化）をテーマに展開した。一般社会人も学生も学べる環境づくりを心掛けたい。国の 2024 農福連携推進ヴィジョンでは、地域との連携（ネットワーク作り）、未来につなげる、ユニバーサル化の 3 つのアクションが提示されたところである。それを踏まえ取り組んでいきたい。

…カリキュラム会議参加団体（連携校）から
▹安達氏（余市養護学校）
子ども達が参加しているトマト摘みの様子をみていて、一緒に作業する仲間がいるという喜びを感じている様子が伺えた。 共生社会の担い手となる生徒を育てている。その指導者の研修システムは必要。生徒はそれぞれ悩みを抱えている。障がいをできないではなく、魅力ある強みとして生かす手立てを考えていきたい。
▹小山氏（札幌みなみの杜高等支援学校）
前任、豊明高等支援高校時から異動に伴って引き続きお世話になっている。本校は他校の支援学校と異なり普通科（普通科職業コース：全 6 コース）であり、選択したコースは全て受講することができる。1 次から 3 次産業までの学びを展開し、社会の産業構造に近い状況で学ぶことができる。しかしながらアグリコース（1 次産業）へを希望する生徒が少ない。希望者が少ないのは就職先が少ないことが一因。今後、この取り組みが就職先の拡大に継がることに期待したい。

▹今井氏（札幌あいの里高等支援学校）
本校は、普通科と職業学科がある。一定数、農業

を就労先と捉えている生徒がいる。就労先の一つとして農業が増えていくことはとても重要なこと。
　前任では教育と農業、福祉が連携する仕組み、教農福連携を行っていた。具体的には農家を実習先として農作業を体験学習して将来の就労先として働きかけていくというもの。町でも農業の担い手として支援していくというシステムだった。課題となったのは、生活の場と通勤手段である。高等支援学校の生徒である現状から、雇用者側が労働力として期待する姿と就労者（生徒・学校）側が就労先として期待する姿にギャップが生じている。当初、協力していた農家も 2-3 年で協力体制をやむなく解くなどが見られた。継続するための仕組みづくりが必要と感じる。

…協力機関からの意見
▹七社氏（北海道農政部農業経営局）
　継続性が重要との話題から我々も 3-5 年で転勤・異動という現状があり、経験を蓄積するのが難しい。その意味で実際にこのように現場にでて福祉を学ぶ機会があるのはとてもありがたい。福祉雇用としては、農作業を福祉事業所へ委託しているのが現状。直接雇用に期待するが件数は少ない。一般就労でも通年雇用が難しい中、農業は変形労働雇用で重労働であり、障がいがある方にとっては厳しい環境。農家の方々にも障がい者への理解が必要。これら課題解決はもちろん必要だが、課題を広げていくことも重要と思い取り組んでいる。

…アドバイザーから
▹濱田氏（東海大学　文理融合学部）
　毎年、Ver.Upし、それぞれの立場から直面している課題をベースに話題を提供していただいた。今回の事案を通して様々な課題が表出できていると感じる。
北陸災害の支援でチャリティ活動したが、被災体験した子供たちから多くのことを学んだ。体験が無く知識のみの学習は効果が薄い。思考を通じての学び（自己肯定感や学びの共有）は有効。今回のプロジェクトはそれができている。障がいがある人と一緒にいる事、一緒に作業する事でその体験を通して教育できる。
行政の面では異動があって、関わっているものの思いが伝わらない。その思いはとても大切だと感じている。現場と乖離している現状は否めない。その意味からも次のヴィジョンのネットワーク形成は重要。
今後は農福教育連携の立場から海外の現状もみながら、北海道独自の農福連携に期待したい。
5.次回予定について
年度終了前の 1-2 月に開催予定、あらためて事務局よりご連絡申し上げる。

～終了

参加者名簿

組織	所属	氏名	備考
コンソーシアム会議(ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ)	特定非営利法人どりーむ・わーくす	水尻　宏明	リモート参加
〃	株式会社ネクストリソース	大泉　浩一	
コンソーシアム会議	株式会社 dispo.	三上　智史	
〃	北海道教育庁学校教育局	滝田　尚誠	
〃	北海道余市紅志高等学校	生田　仁志	
〃　(ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ)	東海大学　文理融合学部経営学科	濱田　健司	
カリキュラム会議	市立札幌みなみの杜高等支援学校	小山　学	
〃	北海道余市養護学校	安達　雅美	リモート参加
〃	市立札幌大通高等学校	前田　有美子	
〃	市立札幌豊明高等支援学校	益満　等之	リモート参加
協力機関	北海道農政部農業経営局	七社　貴郎	
〃	北海道あいの里高等支援学校	今井　章文	リモート参加
事業代表機関	学校法人西野学園	前鼻　英蔵	
事業責任者	〃	熊谷　修司	
事業担当者	〃	佐藤、飯島、幡、　酒井	
事務担当者(事務局)	〃	市川、万行、長井	

第2回コンソーシアム会議　議事録

日　時:令和 7 年 1 月 31 日(金)15:00～16:30
場　所:学校法人西野学園　札幌医学技術福祉歯科専門学校　2Fコミュニティルーム
司会進行:　岡積義雄(学校法人西野学園)
出席者:対面 14 名、web4 名、計 18 名(詳細別紙)

1.理事長あいさつ
前鼻英蔵(学校法人西野学園)
2.令和6年度の活動報告について
(1)連携授業について
1)余市紅志高校との連携について
佐藤誉匡(精神保健福祉科)
2)札幌圏域高校等との連携について
幡　直人(精神保健福祉科)
(2)農福連携ソーシャルワークコースのカリキュラムについて
1)農福連携の実際Ⅰ
飯島英幸(精神保健福祉科)
2)フィールドワークⅠ
酒井　啓　(精神保健福祉科)

上記、(1)(2)について別紙資料①②③④を基に各担当者より説明がなされた.

・芽かき作業がなすトマト収穫作業での重要性を説明してほしい。
→昨年度はトマト収穫作業で作業手順書を作成したが収穫時期(期間)が限定され手順書作成支障があった。その反省を生かし長い期間を要する芽かき作業に替えたことでほぼ毎回で作成作業を実施できた。
・札幌圏域高校との連携においてねらいは達成されたか教えてほしい。
→おおむね、もともと福祉/農業に興味がある生徒が参加していたのは前提としてあるが、それでも興味が感じられた生徒が多かった。
・農福連携の実際について受講者アンケートでは満足感での質問が多いがそれ以外の観点で多様な視点ではいかがか教えてほしい。
→実証講座での時間配分はどうだったかなどの問いに対して、90分の講義内に質疑応答時間を多く設けたことが功を奏し、積極的な質問が多く、さらに道農政部からも助言などにより、充足された講義時間となり満足度は高く適切だった。
また自由記述からは各々異なる視点から助言を得られる機会となり大変有意義との回答も多く寄せられた。

3.参加団体から(敬称略)
…コンソーシアム会議参加団体から
▹前田氏(市立札幌大通高等学校)
今年度は10名の生徒が参加、うち3名はキャリア探求の単位取得を申請している。この事自体、多くの生徒がこの授業に興味を持っている証拠。中でも心理学系にしか興味がなかった生徒が福祉と心理学を学びたいと進路を再検討した生徒や進路未定の生徒が全8回の講座をとおして福祉に興味を見出し、この経験をしなければ視野が広くならなかったであろうと考えられた。自分自身、社会福祉科通信課程に通学しているがまさにこの農福連携での経験があったからこそであり、この機会に感謝している。

▹高田氏(北海道教育庁学校教育局)
道立高校の生徒のためにこのような機会をもらったことに感謝している。高校では連携として小中学校や養護学校、企業。接続の意味では小中、高専、高大と進む中でと進み、探求授業として力を入れている。その中で重要なのは高校生がどのよう資質・能力を持っているのかを把握すること、共有することが大事である。連携先、接続先とさらなる密な情報共有や支援をしていくことが発展につな

がる。

…コーディネーターから
▹水尻氏（コーディネーター）
　事業の残り2年となった今、3つのポイントが考えられる。①3年カリキュラムの発進、カリキュラムの完成度の検証。②初の卒業生が輩出される。彼らのキャリア形成の中で生かされるか。③1年目連携授業として学んだ生徒（高校生）が学生として専門学校に入学してくる年。もともと高専接続による農福連携人材の育成という願いを叶えたい。

▹大泉氏（コーディネーター）
　道庁との共同事業として社会人が参加となった。授業の中に大人が入ってくる。コンテンツは高校生等が事象から学べるように工夫したが、社会人が入ることによって制度的、仕組み的側面からアプローチしてコンテンツを作成した。結果、解りやすいとの回答が得られ、上手く改善できたと思っている。今後、生の声をフィールドで聞いて学んだり、授業を展開したり、などに取り組みたい。また、道外の農福連携に関わってみたり、実際に依頼されたコーディネートを体験させたい。

……カリキュラム会議参加団体からの意見
▹宮岸氏（余市養護学校）
　生徒たちに有意義な機会を感謝している。本校の生徒は比較的障外の重度な子供たちが多く、してもらうことが多い子供たちである。その子供たちが役に立っていると感じてくれるのはとても有意義である。また、学生がそのような経験をとおして共生社会を感じとれてもらえたことはとてもうれしい。今後、自校でも余市の基幹産業の果樹園などを中心とした取り組みを行っていきたい。

…協力機関からの意見
▹七社氏（北海道農政部農業経営局）
　農福連携入門講座にたくさんの修了者が出てうれしい。研修では農福連携界のレジェンドから講義を受け、当局職員のレベルアップにもつながった。

…アドバイザーから
▹村田氏（学校法人西野学園）
　高校生のキャリア形成に期待が大きい。外部に表出できるようお願いしたい。そのポイントは狙いと結果の完成度や達成度の比較をセールスポイントとしてアピールできるとよい。相対的援助活動等と合わせ様々な観点とつながる要素は大きいと考える。高校の中に入っていきいくつも展開できそうな内容を考えると良い。

▹濱田氏（東海大学　文理融合学部）
　短期間で試行錯誤しながらやってきたのがよく伝わる。全国的にもやっているといわれるが決して多くはない。特に農福機関連携は少ない。当大学でも実践してみた。形式的な学びからは学ぶことができない直感的なつながりはとても大きな効果としてみることができる。当大学の生徒の生き生きとした目を見ることを実感できた。
　西野学園の取り組みを北海道の農福連携モデルとして紹介したいと思っている。特に専門学校がこの取り組みを行っていることは、とても意義が大きい。今後の発展に期待する。

5.次回予定について
　次年度事業開始の 5-6 月に開催予定、あらためて事務局よりご連絡申し上げる。

～終了

参加者名簿

組織	所属	氏名	備考
コンソーシアム会議（ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ）	特定非営利法人どりーむ・わーくす	水尻　宏明	リモート参加
〃	株式会社ネクストリソース	大泉　浩一	
コンソーシアム会議	株式会社 dispo.	三上　智史	欠席
〃	北海道教育庁学校教育局	髙田　安利	
〃　（ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）	東海大学　文理融合学部経営学科	濱田　健司	リモート参加
〃　（ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）	学校法人西野学園　顧問	村田　尋如	
カリキュラム会議	北海道余市養護学校	宮岸　尚平	リモート参加
〃	市立札幌大通高等学校	前田　有美子	
協力機関	北海道農政部農業経営局	七社　貴郎	リモート参加
〃	いきいきファーム	吉岡　宏直	欠席
事業代表者	学校法人西野学園	前鼻　英蔵	理事長
事業責任者	〃	熊谷　修司	校長
事業担当者	〃	岡積　義雄	司会
事業担当者	〃	佐藤、飯島、幡、酒井	教員（4）
事務担当者	〃	市川、万行、長井	事務局（3）

※リモート参加者：4名、対面参加者：14名、計 18 名

第２項　カリキュラム会議

<table>
<tr><td>会 議 名</td><td colspan="2">第1回　カリキュラム会議</td></tr>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="2">令和6年4月11日（木）　16 時 30 分　～　17 時 00 分</td></tr>
<tr><td>会　場</td><td colspan="2">札幌心療福祉専門学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">参 加 者</td><td rowspan="2">委 員</td><td>大泉　浩一（コーディネーター）
水尻　宏明（コーディネーター）
佐藤　誉匡（札幌心療福祉専門学校）
飯島　英幸（札幌心療福祉専門学校）
酒井　啓（札幌心療福祉専門学校）</td></tr>
<tr><td>参加者　５名</td></tr>
<tr><td>会 議
概 要</td><td colspan="2">１　授業構想の確認。
（1）　農福連携の実際Ⅰ
別紙の通り授業を行っていくことを確認した。
（2）　フィールドワークⅠ
別紙の通り授業を行っていくことを確認した。
（3）　余市紅志高校との授業の説明を行った。

２　農政部の修了証の件を伝える。札幌圏域の連携授業に８回中５回参加した場合は修了証を渡すことができるようになった。

３　その他
水尻さんより情報として、静修高校で通信制を開始し、コンタクトをとった方が良いのではとご助言をいただいた。理事西辻さんとやり取りをした。校長先生（宮路真人）にアポを取ったらよいのではとアドバイスをいただいた。

今後、10 月とか早い段階でカリキュラム会議を開いた方が良いとなった。

（文責：酒井　啓　）</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td>会 議 名</td><td colspan="2">第2回 カリキュラム会議</td></tr>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="2">令和6年 10 月 31 日（木） 15 時 00 分 ～ 18 時 00 分</td></tr>
<tr><td>会 場</td><td colspan="2">札幌心療福祉専門学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">参 加 者</td><td rowspan="2">委 員</td><td>大泉 浩一（コーディネーター）
水尻 宏明（コーディネーター）
熊谷 修二（札幌心療福祉専門学校）
飯島 英幸（札幌心療福祉専門学校）
酒井 啓（札幌心療福祉専門学校）
幡 直人（札幌心療福祉専門学校）</td></tr>
<tr><td>参加者 6 名</td></tr>
<tr><td>会 議
概 要</td><td colspan="2">1 令和6年度これまでの振り返り
（1） 余市紅志高校連携授業

（2） 札幌圏域連携授業（フィールドワーク演習Ⅰ）

（3） 農福連携の実際Ⅰ
別紙の通り進行状況の確認

（4） フィールドワークⅠ
別紙の通り進行状況の確認

2 令和7年度のカリキュラムについて
現状把握及び農福連携コースの方向性の確認
教員と学生両方の想いの共有をして前に進んでいく

3 その他
水尻さんから学生にインタビューを実施していただく前に、一人一人（茨島、斎藤、髙嶋）の入学の動機から、現状把握までのヒアリング→インタビューは 11/12（火）15:00～
11/21（木）16:30～カリキュラム会議第 3 回目

大泉さんから千歳のカワノさんとアポ、富良野の支援センターセンター長とのアポ提案あり

（文責：山田早希 ）</td></tr>
</table>

第 3 章　今年度の事業及び教育プログラムの内容

第1節　　北海道余市紅志高等学校等との連携（令和6年度）

第 1 項　　連携内容

授業テーマ:養護学校生を招いてミニトマトの芽かき作業を行う際の手順書作成

授業回数:合計 10 回（高等学校の科目『地域園芸』2 時間連続授業（100 分）で実施

受講学生:高等学校生 11 名（3 年生）、専門学校生 4 名（2 年生）

月　日	授業内容	場所	授業担当（役割分担）
４月１２日 ①	・オリエンテーション（授業の目的及び目標の確認、農福連携の理解）	余市紅志高等学校	札幌心療福祉専門学校 教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名
４月１９日 ②	・余市養護学校見学（養護学校及び対象者の理解）	余市養護学校	札幌心療福祉専門学校 教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名 余市養護学校 教員 1 名
４月２６日 ③	・知的障害の理解（余市養護学校教員の高校への出前授業） 講師：北海道余市養護学校　教諭 松平 典子 先生	余市紅志高等学校 札幌心療福祉専門学校 （オンライン）	
５月１０日 ④	・手順書の作成と細分化の基礎的な理解 講師：札幌心療福祉専門学校　教員 佐藤 誉匡	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名
５月２４日 ⑤	・余市養護学校生（4 名）とのミニトマトの種まき交流	余市紅志高等学校 （農場）	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名 余市養護学校 教員 3 名
６月　７日 ⑥	・高校生が作成した手順書を活用した専門学校生の模擬体験 → 手順書の使いやすさについての考察		札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名

６月２１日 ⑦	・手順書の再考、修正	各校（オンライン連携）	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名
８月３０日 ⑧	・手順書の再考、修正、完成		
９月　６日 ⑨	・手順書の検証 → 余市養護学校生（4 名）とのミニトマトの芽かき交流	余市紅志高等学校（農場）	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 1 名 余市養護学校 教員 3 名
９月２０日 ⑩	・余市養護学校生（4 名）とのミニトマトの収穫交流 ・連携授業の振り返り		

オンライン授業の様子

高校生　専門学校生

農作業の様子

高校生が専門学校での授業参加の様子

第２項　成果

今年度の余市紅志高等学校との連携授業は、高等学校の『地域園芸』の科目で実施した。連携授業開始前に高等学校の教員と授業の目的及びスケジューリング等に関し密に連絡を取り合い共有したことにより、特別支障なくスムーズに開始することができた。また、下記の目標を掲げ授業を展開した。

① 本授業に参加した高等学校生および専門学校生の成長

・課題を発見し、解決する力を身に付け向上する。

・各学校生や余市養護学校生との交流、失敗や成功体験を通して、相手に対して自分の考えを分かりやすく伝えるコミュニケーション能力、及び協調性を向上する。

・計画性を高め、いつまでに何をどのような形にしていなければならないのか見通しを持ち、自主的に行動できるようになる。

・地域貢献や「農福連携」を軸とした共生社会の実現を意識し、自分のできることを粘り強く取り組もうとする使命感や責任感を高め、積極的に行動できるようになる。

・「農福連携」の多様性について、自主的に考察できるようになる。

② 本授業に参加した高等学校生が福祉に関心を持ち、本校への入学や専門職を目指す者が現れること。

・専門学校生との直接的な関りにより、高校生自身が今後どのような人材になりたいのか将来像を深める。

①に関して、手順書作成（ミニトマトの芽かき作業の手順書を作成し、養護学校生を招いて手順書を使用した交流会を実施）の連携授業を通して、高等学校生及び専門学校生の成長が十分にうかがえた。特に養護学校生との関わりにおいて、各学生が個々に合わせた関り方と分かりやすく話すことを意識して取り組んだ結果、コミュニケーション能力及び人の支えになろうと思う気持ちが向上された。また、養護学校生との交流会を3回実施し、回数を重ねるにつれイベントに向けての計画性や課題解決の意識が高まり、使命感や責任感を持って取り組むことができていた。同時に、障害者の理解が深まったことにより、相手の立場になって多様な角度から物事を考える力が向上され、地域貢献や共生社会の実現に関して考えることができるようになった。

②に関して、本校への入学には至らなかったが、高等学校生自身が今後どのような人材になりたいのか将来像を深め進路選択することができていたように感じる。また、各高等学校生にアンケートを実施し下記の意見が伺えた。

【専門学校生との活動を通して感じたこと】

・話しやすい雰囲気で交流ができ、授業事にアドバイスを詳しく具体的に教えてもらい手順書を作るにあたって頼りになった。

・自分たちには思いつかないアイディアがたくさん出てきて、自分も出せるようになりたいと思った。

・客観的に物事を見ていてすごいと感じた。積極的に話しかけてくれたり、隙間時間に世間話を

したり、とても楽しく活動することができた。
・自分達の良い所・改善すべき所を分かりやすく教えてくれて、自分も同じようになりたいと思った。
【身についてたこと】
・諦めない力、積極性、課題発見力、臨機応変に対応する柔軟性
・コミュニケーション力（自分の考えを明確に伝える、分かりやすく伝える）
・相手の立場になって考えること、作業を分かりやすく分解する技術
・色んな方と話し合いそれを作業に移す姿勢

専門学校生の余市町への移動による疲労が懸念されていたが、昨年同様オンライン授業を活用したことで出席率が安定し支障なく終えることができた。教員間においては、2 年間の実績もあり良好な関係性を保ち各自、臨機応援に対応しつつ共通認識を持って授業展開することができた。昨年度に引き続き余市養護学校を含めた3校連携した授業も実施することができ、当事者との直接的な交流から対人スキル及び農作業における福祉的視点を培うことができた。また、今年度の新たな取り組みとして高等学校生を専門学校（札幌市）に招いて連携授業を実施したことで、専門学校における学習イメージも深めることができたと考える。
次年度は、今年度同様に手順書作成（作業の細分化）をテーマに掲げた余市紅志高等学校と余市養護学校との 3 校連携授業を、オンライン授業を併用して実施する運びとなっている。今後は、養護学校生との交流回数やどの作物でどの作業の手順書を作成するかなど、各教員と検討していく予定である。

第２節　札幌圏域の高等学校等との連携（令和6年度）

第1項　連携内容

授業テーマ：農業の栽培から収穫、加工、販売までの流れを体験するとともに、各工程において誰もが力を発揮できる環境を整える視点を養う

授業回数：合計８回（市立札幌大通高等学校は「キャリア探求」の科目として単位認定を行う）

受講学生：市立札幌大通高等学校生 5～10 名、社会人 5～10 名、本専門学校生 3～4 名

実施体制：今年度は本連携授業を「令和６年度　農福連携入門講座」としても位置付け、北海道保健福祉部・農政部との共催という形で実施することとなった。そのことにより、本講座全８回のうち５回以上出席した方には、北海道保健福祉部長・農政部長連名での修了証が発行されることとなり、高校生と専門学校生だけでなく、広く一般の方にも参加者を募ることとなった。北海道が募集にも協力してくれ、多くの一般の方の参加もあった。

月　日	授業内容	場所	授業担当（役割分担）
５月１１日	・オリエンテーション ・演劇ワークショップ	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 北海道演劇財団　演出家１名 市立札幌大通高等学校　教員１名
６月１５日	・農家の仕事について ・農作業体験（畑作業）	農場	札幌心療福祉専門学校 教員２名 合同会社竹内農園　代表社員１名 市立札幌大通高等学校　教員１名
７月６日	・農業のユニバーサル化 ・作業の細分化とマッチング	農場	札幌心療福祉専門学校 教員２名 NPO 法人どりーむ・わーくす理事長 市立札幌大通高等学校　教員２名
７月２０日	・野菜の流通について ・マルシェのチラシ作り	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社感動いちば　営業部兼　商品課　課長代理１名

			株式会社ネクストリソース代表１名 市立札幌大通高等学校　教員１名
８月２４日	・利益の出し方と、労働者（障害者等）への工賃の関係について ・商品販売の基礎知識について ・魅力的な売り場づくり（ＰＯＰなど）	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社ネクストリソース代表１名 市立札幌大通高等学校　教員１名
９月２１日 ９月２２日 ※どちらか参加で１回分	・農福マルシェの開催（赤い羽根共同募金ブースも併設）	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員３名 株式会社ネクストリソース代表１名 札幌市中央区社会福祉協議会職員２名 市立札幌大通高等学校　教員１名
１１月９日	・農福商工連携について ・その一つの事例としてのハーブティー作り	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 教員２名 株式会社アット・ボタニカル代表取締役（ハーブスペシャリスト）１名 シミックホールディングス株式会社　CEO オフィス　生薬事業部　社員１名
１２月７日	・農福の６次化 ・調理実習	札幌医学技術福祉歯科専門学校	札幌心療福祉専門学校　教員２名 合同会社 FSS 代表社員１名 ペルル店長１名

第 2 項　成果

毎回の授業後、受講者には授業で学んだことについてアンケート及びインタビューを実施した。

アンケートは、授業前と授業後の気持ちを 0〜10 段階で次の 4 項目について聞いた。①授業へのワクワク度合い、②福祉についてもっと知りたい度合い、③農業についてもっと知りたい度合い、④将来、福祉や農業の仕事に関わってみたい度合いである。

また、高校生に対しては「自分の将来や仕事のことを考えるきっかけになったか」を同じく 0〜10 段階で聞き、専門学生と一般社会人には「高校生らと一緒に授業に取り組むことは学びを深めることに役立ったか」を 0〜10 で聞いた。

その他に、1 回目から 8 回目の授業毎にどれだけ自身に役立ったかを測る質問を受講者の属性に関わらず同じく 0〜10 で質問をしている。

1 回目は「初めて会う人たちで楽しみながら仲よくなる体験」「言葉だけによらないコミュニケーション」「色々な年齢、立場の人と一緒に一つのものを作ったこと」、2 回目及び 3 回目は「農家のお仕事内容や工夫点についてお話を伺ったこと」「皆で農作業を行ったこと」「ひとつの作業について皆がやりやすい役割分担を考えたこと」、4 回目は「野菜の流通に関わるお仕事内容や工夫点についてお話を聞いたこと」「チラシを作成したこと」「ひとつの作業に皆がやりやすい役割分担を考えたこと」、5 回目は「就労支援事業という福祉サービス、福祉業界の話を聞けたこと」「商品販売の基礎知識について聞けたこと」「皆で POP づくりや陳列を行ったこと」、6 回目は「マルシェの準備を協力して行ったこと」「実際にマルシェを実施して皆で協力して接客をしたこと」「実際にマルシェを開催し利益がどのくらい出るのかを実感として学んだこと」、7 回目は「ハーブスペシャリストのお仕事や工夫などについてのお話を聞いたこと」「大きい企業のお仕事内容や工夫点などについてお話を聞いたこと」「農産物を加工することで仕事の幅、楽しみの幅が広がることの体験」、8 回目は「農福の 6 次化のお話を聞いたこと」「世代が異なる人達とも一緒に作業したこと」「付加価値についてプロの考え方を学んだこと」である。

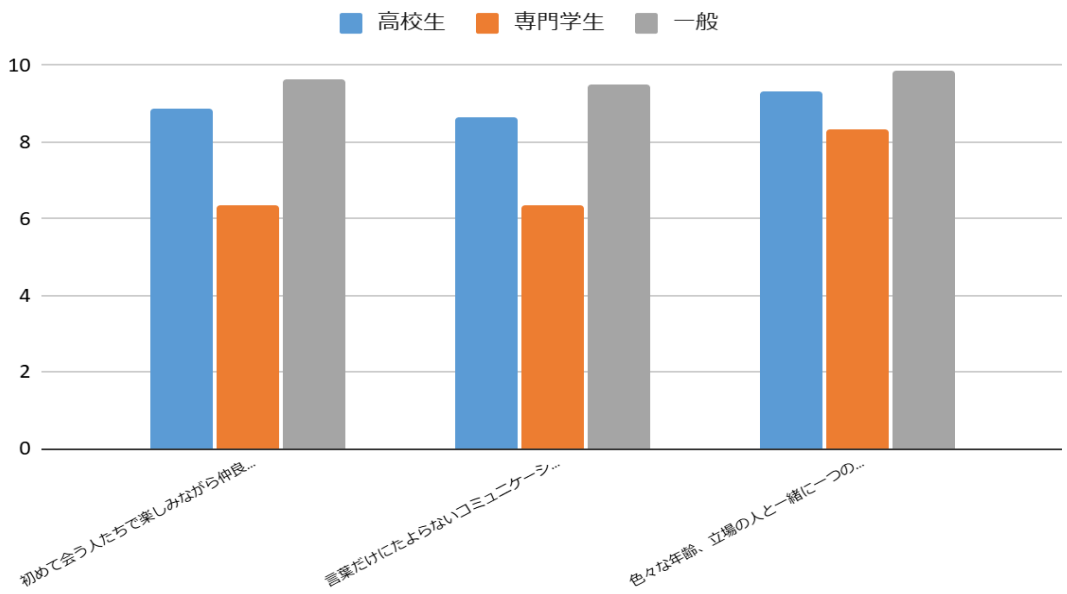
それぞれの結果について、高校生、専門学生、一般社会人の平均値は以下の通りである。

【1 回目】

・「初めて会う人たちで楽しみながら仲よくなる体験」

・「言葉だけによらないコミュニケーション」

・「色々な年齢、立場の人と一緒に一つのものを作ったこと」

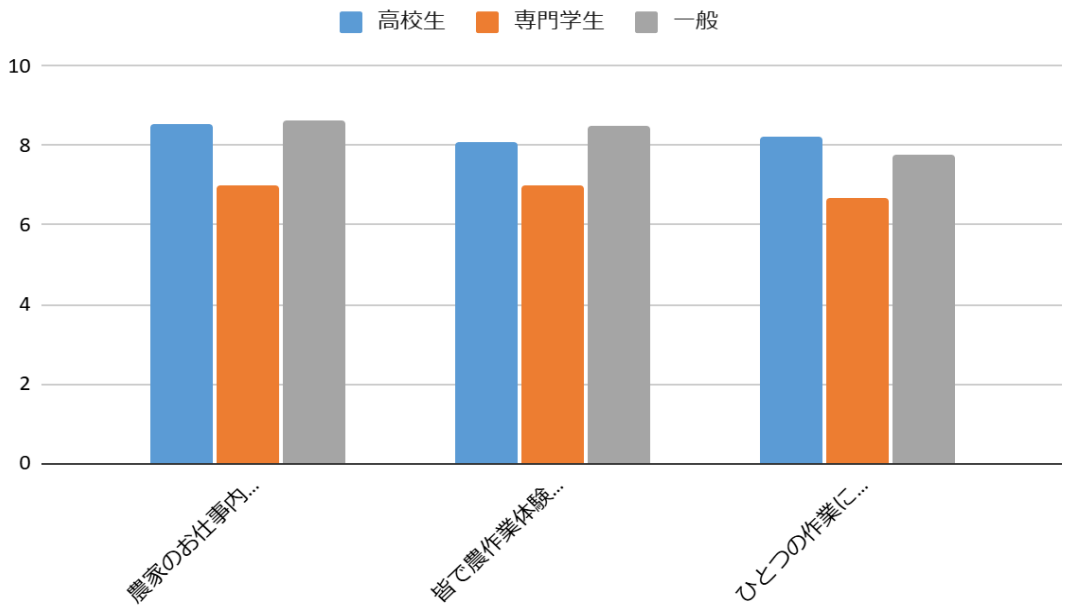


【2 回目】

・「農家のお仕事内容や工夫点についてお話を伺ったこと」

・「皆で農作業を行ったこと」

・「ひとつの作業について皆がやりやすい役割分担を考えたこと」

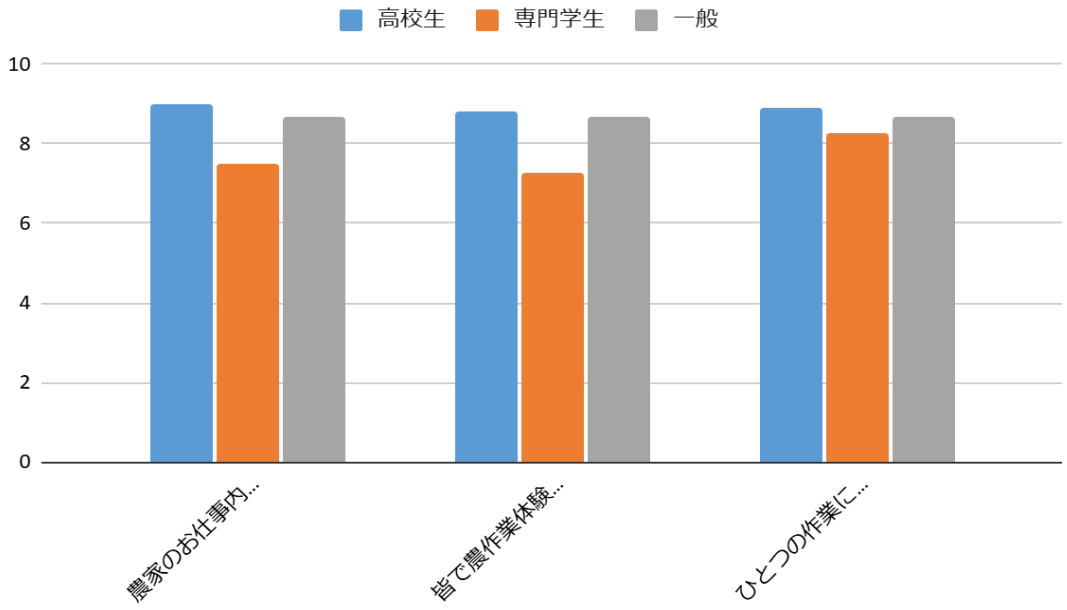


【3 回目】

・「農家のお仕事内容や工夫点についてお話を伺ったこと」

・「皆で農作業を行ったこと」

・「ひとつの作業について皆がやりやすい役割分担を考えたこと」

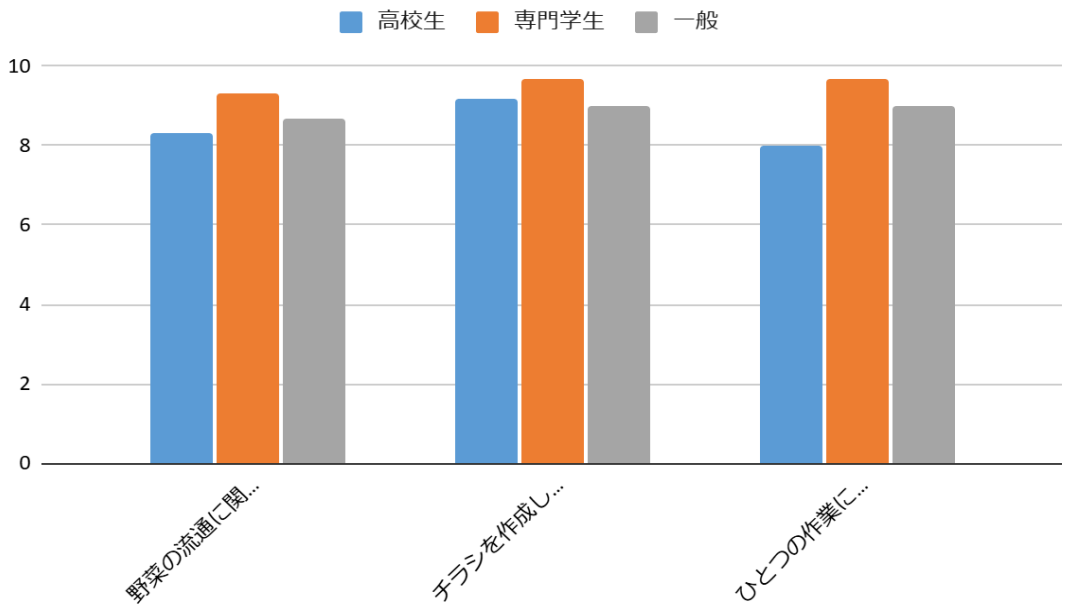


【4 回目】

・「野菜の流通に関わるお仕事内容や工夫点についてお話を聞いたこと」

・「チラシを作成したこと」

・「ひとつの作業に皆がやりやすい役割分担を考えたこと」

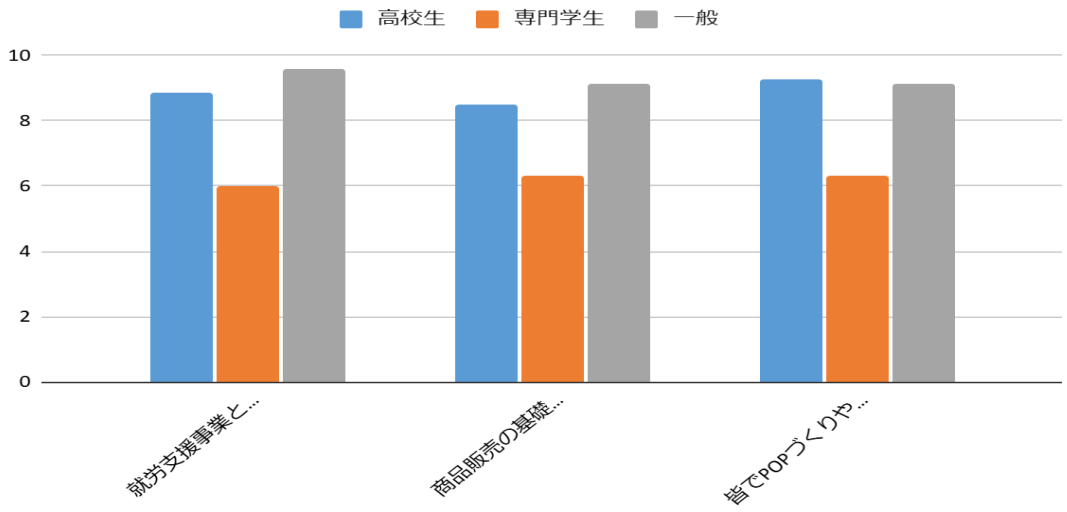


【5 回目】

・「就労支援事業という福祉サービス、福祉業界の話を聞けたこと」

・「商品販売の基礎知識について聞けたこと」

・「皆で POP づくりや陳列を行ったこと」

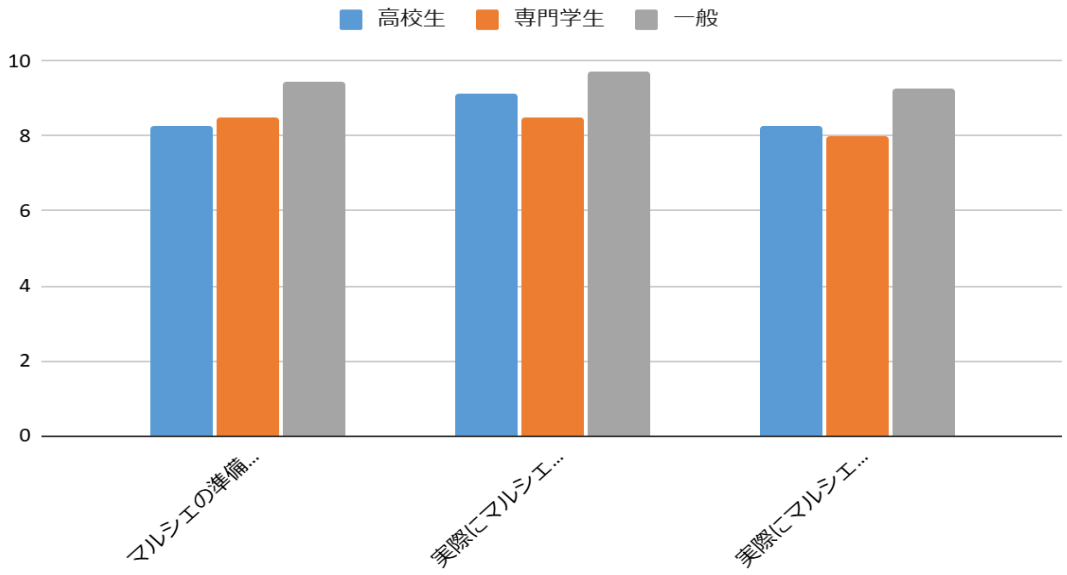


【6 回目】

・「マルシェの準備を協力して行ったこと」

・「実際にマルシェを実施して皆で協力して接客をしたこと」

・「実際にマルシェを開催し利益がどのくらい出るのかを実感として学んだこと」

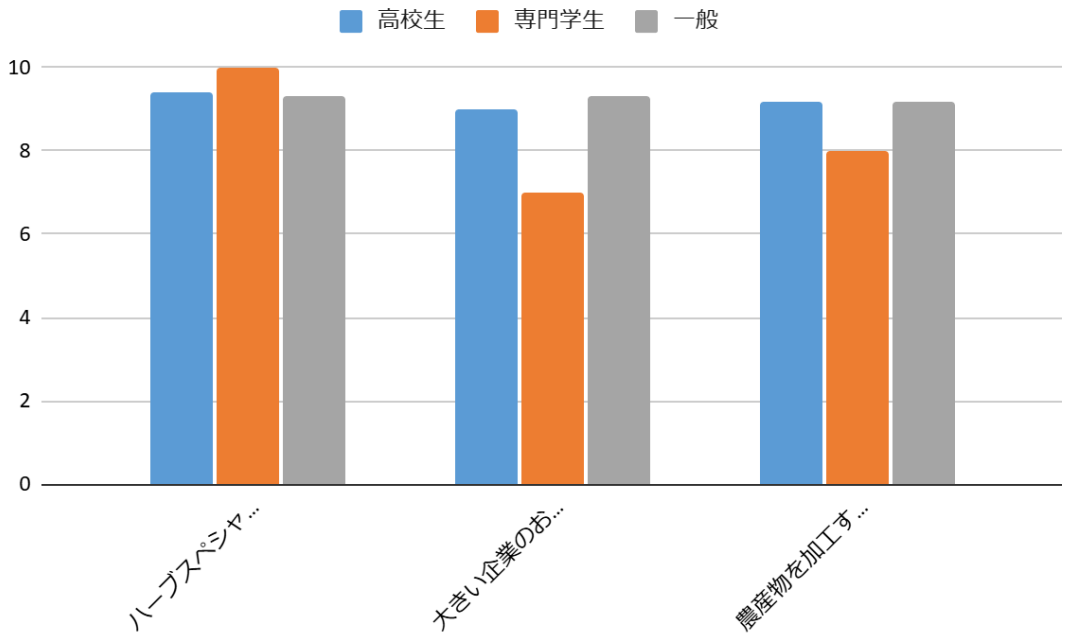


【7 回目】

・「ハーブスペシャリストのお仕事や工夫などについてのお話を聞いたこと」

・「大きい企業のお仕事内容や工夫点などについてお話を聞いたこと」

・「農産物を加工することで仕事の幅、楽しみの幅が広がることの体験」

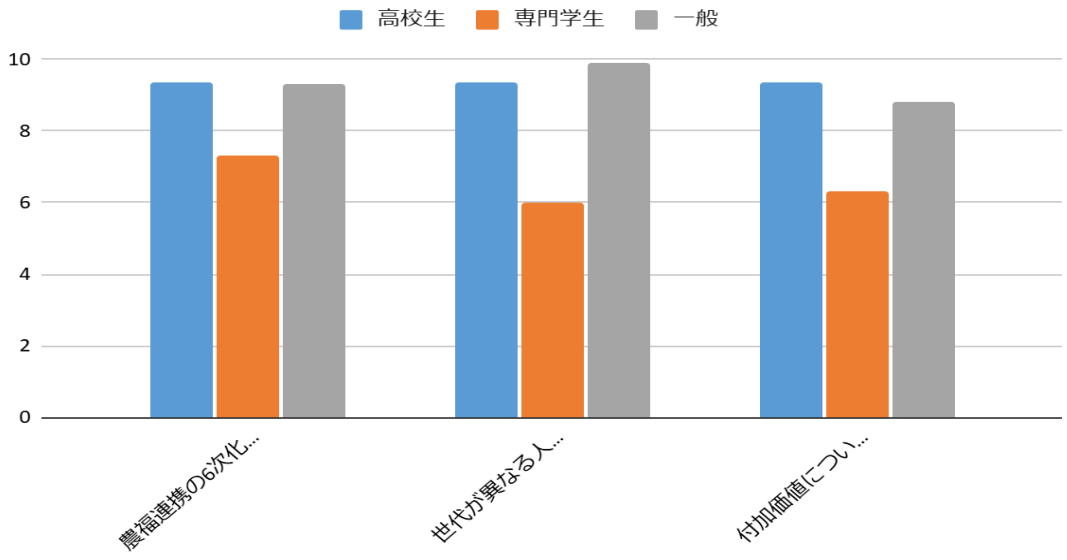


【8 回目】

・「農福の 6 次化のお話を聞いたこと」

・「世代が異なる人達とも一緒に作業したこと」

・「付加価値についてプロの考え方を学んだこと」



インタビューについては、高校生グループ、専門学生グループ、一般社会人グループに分かれ、「本日の授業を受けて、一番楽しかったことは何ですか」「本日、新しく知ったこと、印象に残ったことは何でしたか」「授業の中で自分が一番頑張って取り組んだこと、今日取り組んだ中で、自分が力を発揮できたこと、得意だと感じたことは何でしたか」「他の高校生や大人などと一緒に授業を受ける上で意識したことがあれば教えてください」という質問を基礎として、自由に意見を述べてもらう形をとった。

毎回の授業後にそれぞれのグループに上記内容でインタビューした結果を総合し、そこから見えてきた内容は以下の通りである。

【高校生】

1. コミュニケーションスキルの向上
2. 協働作業を通じた協調性とチームワーク力の成長
3. 農福連携への理解と社会課題への関心の深化
4. 主体性・リーダーシップ・自信の獲得
5. 多世代からの学びと視野の広がり
6. 課題解決力・行動力の向上
7. 忍耐力と集中力の強化
8. 商業的・経済的視点の理解
9. 自己表現力や創造性の開花
10. 実生活や日常との結びつき

以上を総合すると、「実践的な学びを体験し、多様な人々との交流から視野を広げ、主体性や協調性、自信を高めながら、社会課題や経済的な視点への関心を深めることができた」という意見が聞かれたと言える。

【専門学生】

1. 多世代交流を通じた高度なコミュニケーションスキルの向上
2. リーダーシップと協働力の実践的な成長
3. 農業・農福連携に関する知識と理解の深化
4. 実践を通じた課題解決力と自己効力感の向上
5. 他者理解や多様性への柔軟な対応力の醸成
6. ビジネス的視点や経済への理解と応用スキルの育成
7. チームワークによる達成感と責任感の獲得
8. 主体性と探求心の発達
9. 実生活や社会で役立つスキルの取得
10. 成果物を通じた達成感と自己肯定感の獲得

以上を総合すると、「多世代交流を基盤とした高度なコミュニケーションスキルやリーダーシップ能力」、および「農業と福祉の現場における実践的な課題解決スキル」を獲得し、さらに「主体的な学びの姿勢」や「幅広い知識と視野の獲得」を達成」したという意見が聞かれたと言える。

【一般社会人】

1. 多世代交流を通じて広がる新しい視野と柔軟な姿勢の養成
2. 新しいコミュニケーションスキルの習得と信頼関係の構築
3. リーダーシップとサポート力の向上
4. 農福連携の社会的意義と課題の深い理解
5. 若い世代からの刺激と固定観念の再評価
6. 実践を通じた具体的スキルの獲得と応用力の向上
7. 自己省察と持続的な成長意欲の向上
8. チームワークを通じた達成感と前向きな姿勢の育成
9. 農福連携の普及や実践への動機付け
10. 社会人としての次のステップへの気づき

以上を総合すると、「多世代交流による固定観念の払拭と柔軟性の拡張」「農福連携の社会的意義と課題の理解」「リーダーシップとサポートスキルの実践」「次世代への支援や社会貢献意識」 が獲得できた」という意見が聞かれたと言える。

アンケート及びインタビュー結果を踏まえると、本講座は「農業の栽培から収穫、加工、販売までの流れを体験するとともに、各工程におい て誰もが力を発揮できる環境を整える視点を養う」ことをテーマとして実施したが、その学習効果は一定程度認められたと考える。

また、高校生にとっては自分よりも経験が豊富な専門学生や社会人をモデルとして多くのことを学び、また、自身の取り組みが認められることによって自信をつける機会となった。

専門学生にとっては、高校生同様に経験豊富な社会人をモデルとした学習もしつつ、高校生に対してはリーダーシップを発揮するなどの機会になった。

一般社会人にとっては、「上司・部下」などの関係ではなく、高校生や専門学生と対等な立場で学ぶ機会が新鮮であり、柔軟な思想や新たな視点の獲得等に繋がった。

以上が本講座の成果である。

第3節　教育プログラムの開発

第１項　実証講座の内容

「農福連携の実際Ⅰ」の科目において4回実施する。

第1回　　5月21日（火）　株式会社　大森農園　　大森　一弘先生

参加者　北海道農政部　2名　上川総合振興局　3名

上川農業改良普及センター　2名

第2回　　6月11日（火）　京丸園株式会社　　鈴木　厚志先生

参加者　北海道農政部2名　後志農業改良普及センター　2名

第3回　　7月16日（火）　三重県障がい者就農促進協議会　中野　和代先生

三重県農業大学校　副校長　富所　康弘先生

参加者　北海道農政部2名　上川総合振興局　3名

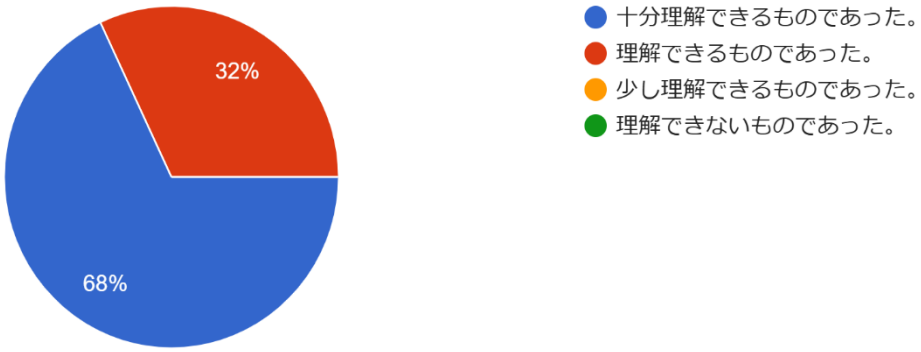
上川農業改良普及センター　2名

第4回　　11月12日（火）　パーソルダイバース株式会社　神奈川事業部

よこすか・みうら岬工房　マネジャー　岩﨑　諭史先生

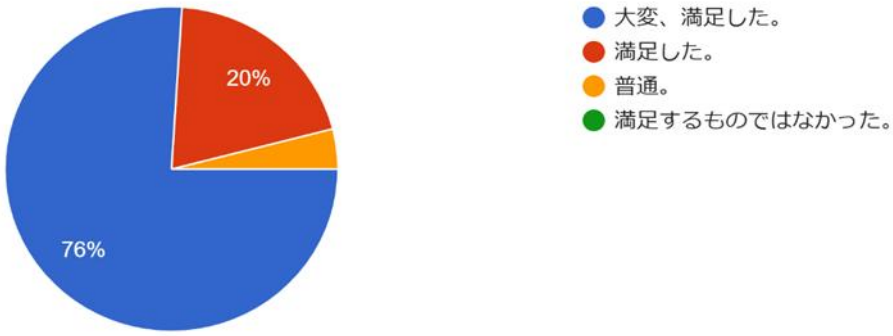
参加者　北海道農政部2名

１　講義の内容について当てはまるものを選んでください。



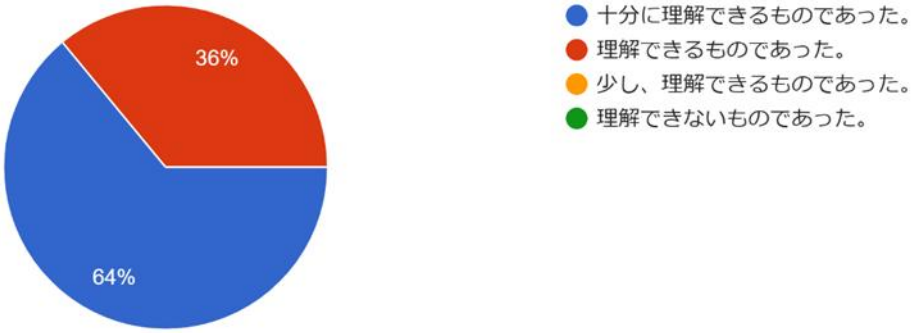
講義の内容について「十分理解できるものであった」が68％、「理解できるものであった」が32％であった。このことから講義内容としては理解できるものであった。そして、農福連携について具体的な実践についての内容であった。

2　講師の進め方について当てはまるものを選んでください。



講師の進め方については「大変、満足した」が76％、「満足した」が20％、「普通」が4％であった。パワーポイントを活用して授業を進めることが中心であった。このことから講義の進め方については問題なく進めてられていたことが理解できる。

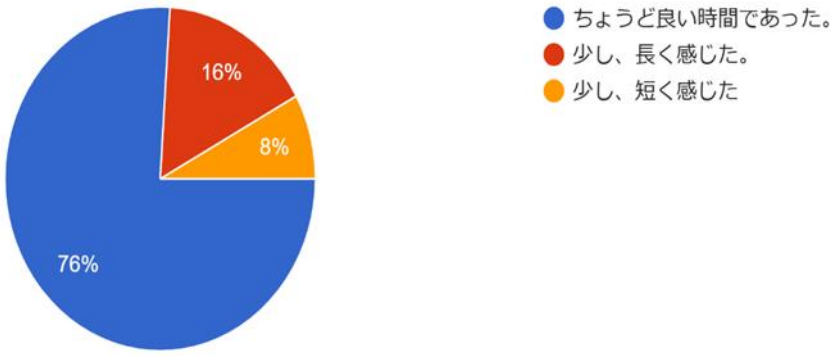
3　資料の内容について当てはまるものを選んでください。



資料内容について「十分に理解できるものであった」が64％、「理解できるものであった」が36％であった。講義の資料はパワーポイントで作成されたものが多く、事前にオンライン参加者へ資料を配布して対応した。パワーポイントを活用し進めていくのが中心であり、取り組まれている実際の内容がわかる写真や動画も盛り込み、さらに講義内容を理解するものとして有効活用されていた。

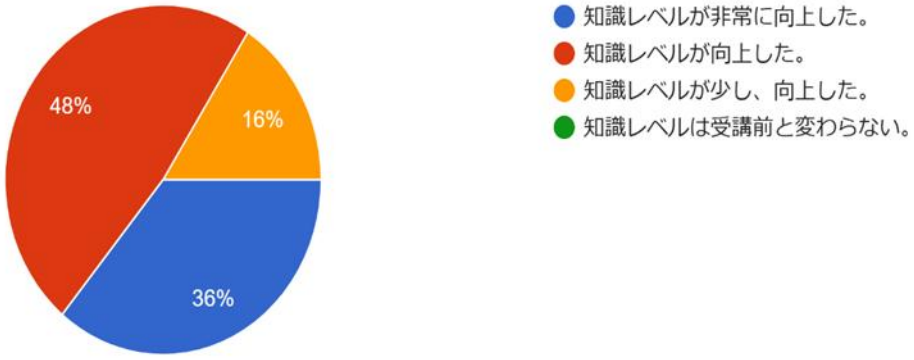
このことから資料についても理解しやすいものとなっていることが分かる。

4　講義の時間の長さについて当てはまるものを選んでください。



講義の時間の長さについて「ちょうど良い時間であった」が76％、「少し長く感じた」16％、「少し短く感じた」が8％であった。このとから講義の時間もちょうど良い時間であったことが理解できる。
講義は70分程度を行い、質疑応答が15分程度、アンケートを5分の合計90分。
講義は時間通りに終了するも質問が多い時があり、その際、時間を少し超えてしまうことがあり、反省すべき点である。

5　実証講座を受ける前と比べて知識レベルの変化について当てはまるものを選んでください。



実証講座を受ける前と比べて知識レベルの変化について「知識レベルが向上した」48％、「知識レベルが非常に向上した」が36％、「知識レベルが少し、向上した」16％であった。このことからこの講義を受けることにより受講する前に比べると農福連携に関する知識が向上したことが分かる。

意見・感想など
・実際の作業をどのようにしているか大変わかりやすかったです。
・学生さんが積極的に質問されていて、とても頼もしく感じました。
・さまざまな工夫をされて働きやすくまた効率的な環境づくりをされていて大変参考になりました。
・農福連携の現状を知る良い機会になりました
・障害者の方と向き合っていくことはとても大変だと感じましたがたくさんの苦労や失敗を通して良い方向に行くんだなと思いました。
・農場での農福連携の概要から、一部器具等の説明など詳細部分も聞けて、非常にバランス良く、聞きやすい講義でした。
・初めて農福連携の話を聞きました。大変貴重な話を聞くことができました。
・大変勉強になりました。ありがとうございました。
・本日は、貴重な講義ありがとうございます。農福連携を勉強中ですので、非常に勉強になりました。実際に農福連携が普及する前から取り組まれておられ、試行錯誤や、失敗談を赤裸々に話しておりましたので、より理解が深まりました。ありがとうございました。
・参考になりました。
・ナビゲーションマップが、特に参考になりました。ありがとうございました。
・どのように取り組まれてきたのか具体的に聴けて面白かったです。笑いどころも面白かったです。
・農福連携の農家さんにもたくさんの経営の仕方があるんだなと勉強になりました。
・実際に働いている方々をみてみたいと思いました。
・鈴木先生の農業経営戦略が印象に残りました。次の世代のために、農地や働き手を残す事、その為に、現在の働き手の老若男女となっている等。また、農福連携の言葉が生まれる 30 年前から取り組んで来た事に驚きです。また、参加させていただきますので、よろしくお願いします。
・強い農業経営体をつくりたい思いから ビジネスパートナーとして障害者雇用を考えている視点が素晴らしい取り組みだと思いました。
・事例を話しながら説明してくれたのでとてもわかりやすかったです。
・福祉側の観点のお話も聞けてよかったです。
・非常に参考となる内容でした。今後の支援に活かしていきたいと思います。ありがとうございました。
・講座全体の講師について共有されていると、ご紹介など内容の重複が無くて良いのでは、と思いました。
・農業側も福祉側も人を育てる根っこは同じということが印象に残りました
・私もほぼ知識がない中、このような講習に参加させて頂きありがとうございます。少しずつですが、知識を深め理解し、農福連携に携わって行ければと思います。
・本日は講義ありがとうございました。中野先生の話でもありましたが、障がい者の本当のやりたい事は何なのかと考えさせられました。こちらとしては良かれと思いながらも、実際は障がい者の可

能性について、阻害してしまっていたのかもしれません。また、農福連携については、少しずつ広がってはいますが、まだまだ周知が必要であると思います。富所先生の説明でも、76%の農業者は貴重な人材と評価しておりますが、残りの 24%は何が原因であったのか。せっかく農福連絡に取り組まれたのに、辞められてしまったのか。農福連携は、農業者の寛大な心が大切と考えております。

・大きな規模で取り組んでいる企業さんのお話しを初めて聞きました。このような会社があると、道内の農家さんも農福連携に取り組みやすいのではないかと思いました。

まとめ

事業計画では3年次の「農福連携の実際Ⅱ」の実証講座を予定していたが、該当する学生が休学となり、開講することができないため、今回、2年次の「農福連携の実際Ⅰ」を実証講座として実施した。北海道農政部などの専門的な立場の方のアンケート結果からこの授業が農福連携を理解する内容として有効であると理解することができた。また、学生の農福連携に関する知識・理解の向上はもちろん、専門的な立場の方の知識向上につながっていることを理解することができた。今後も継続してこの授業の内容を精査していき、農福連携について理解を深められる内容にしていきたい。

第 2 項　フィールドワークⅠ（実習）の内容

授業テーマ：農福連携をコーディネートするために必要な知識と技術・ノウハウを説明することができる様になるため、農業実践者の言葉、生活を知る。

授業回数：合計 81回（農場実習と学校の講義を含めて実施）

受講学生：専門学校生4名

月　日	授業内容	場所	授業担当（役割分担）
４月１６日 ①②③	・オリエンテーション（実習の趣旨説明） ・実習先（吉岡農園）の指導者から農業実習の説明	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校　専任教員１名 吉岡農園　代表吉岡　宏直
５月７日 ④⑤⑥	・実習関係書類配布・説明 ・実習に向けての準備（レタス・カボチャの生育課程を調べる）		札幌心療福祉専門学校　専任教員１名

５月１３日 ⑦⑧⑨⑩ ５月２０日 ⑪⑫⑬⑭ ６月３日 ⑮⑯⑰⑱ ６月１０日 ⑲⑳㉑㉒ ６月１７日 ㉓㉔㉕㉖	・吉岡農園実習第１クール（レタス・カボチャ等の播種や移植、レタス・カボチャの生育観察、トマトの収穫）	吉岡農園	札幌心療福祉専門学校　専任教員１名 吉岡農園　代表吉岡　宏直
６月１８日 ㉗㉘	・吉岡農園実習第１クールで学んだことをまとめる。	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校　専任教員１名
６月２５日 ㉙㉚	・まとめたものを吉岡氏に報告し、5 回分の実習の振り返りと次のクールに向けた準備を行う。	吉岡農園	札幌心療福祉専門学校　専任教員１名 吉岡農園　代表吉岡　宏直
７月１日 ㉛㉜㉝㉞ ７月２日 ㉟㊱㊲㊳ ７月８日 ㊴㊵㊶㊷ ７月２２日 ㊸㊹㊺㊻ ７月３０日 ㊼㊽㊾㊿	・吉岡農園実習第 2 クール（主に南蛮の収穫、レタス・カボチャの生育観察、レタスの収穫、袋詰め）		
８月２日 51.52	・吉岡農園実習第 2 クールで学んだことをまとめる。	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校　専任教員１名
９月２日 53.54	・まとめたものを吉岡氏に報告し、5 回分の実習の振り返りと次のクールに向けた準備を行う。	吉岡農園	札幌心療福祉専門学校　専任教員１名 吉岡農園　代表吉岡　宏直
９月２日 55.56 ９月３日 57.58.59.60	・吉岡農園実習第 3 クール（カボチャの収穫、磨き、測量。ジャガイモの収穫、南蛮の収穫）		

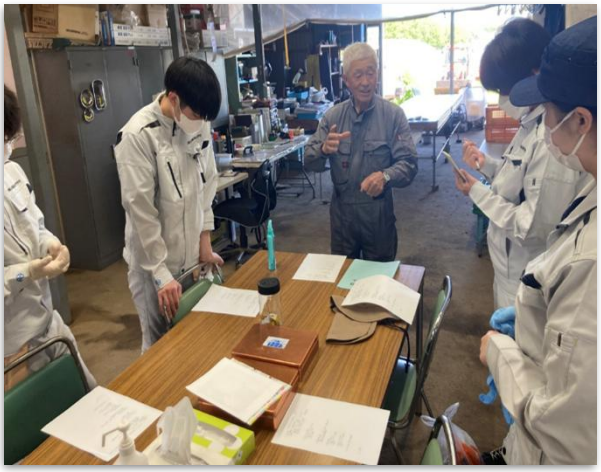
９月４日 61.62 ９月９日 63.64.65.66 ９月１０日 67.68.69.70 ９月１２日 71.72.73.74			
９月１３日 75.76 ９月１７日 77.78	・吉岡農園で学んだことをスライドを用いてグループでまとめる。	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校　専任教員１名
１１月５日 79	・実習報告会のリハーサルと修正		
11 月 11 日 80.81	・実習報告会		札幌心療福祉専門学校　専任教員４名 吉岡農園　代表吉岡　宏直

農場実習での指導の様子

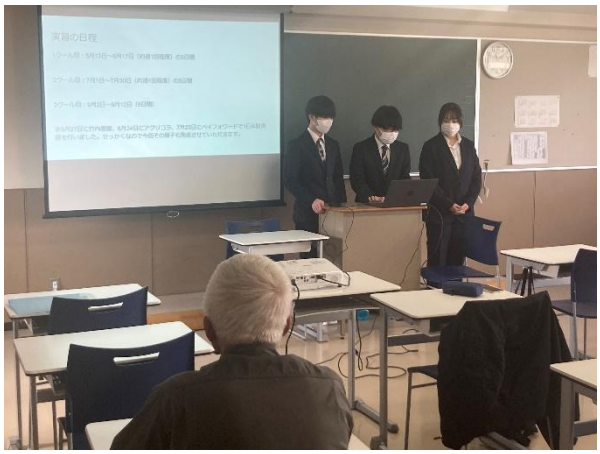
農場実習の実践

生育課程の観察

打合せの様子



報告会の様子



第３項　京丸園　株式会社　視察

1、目的

「農福連携」において全国で取り組まれている先行実践事例での視察を行い、福祉的な視点で農業経営に関われる人材として必要な視点を習得する。また、興味関心が深まり、学習意欲の向上を図ることとする。

２　スケジュール・視察内容（2 年 4 名、引率教員 2 名）

８月５日（月）　移動日

８月６日（火）

09:30～　京丸園の概要の説明

10:30～　京丸園の施設見学

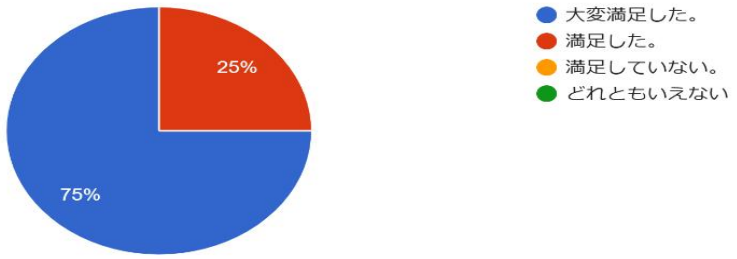
11:30～　ランチョンセミナーの実施

13:30　　終了

８月７日（木）　移動日

3　アンケートの実施（対象参加学生4名、4 名回収）結果

京丸園視察研修は満足しましたか？
4 件の回答



ランチ交流は満足しましたか？
4 件の回答

全部の視察・体験をしての満足感はどうでしたか？
4 件の回答

全体的に視察に関しては、満足したという回答が多かった。

4、　　レポート課題の実施、結果（全文 pp.3 を参照）

回収したレポート 4 人に共通して言えることについて

・京丸園さんの活動をもっと多くの人に広めていきたい。

・昨年度より、学びが深まった。新しい視点を感じた。

・福祉側の視点だけでは、わからないこともある。

5、まとめ

　以上の結果から、昨年度に引き続き、視察を行った。今回の視察先はオンラインで勉強をした

ところに、実際に行くこととなりました。実際にみることで、京丸園の考える農業に触れることで、学生自身が学びをより深めた結果となった。ランチョンセミナー形式で意見交換をしたことも、学生自身リラックスした中で、より質問を投げかけやすい状況を作ったと思われた。

氏名	京丸園視察研修を通して学んだことはなんですか？ソーシャルワーカーとして大切にするべき視点や価値等について考えてみて下さい。(200文字以上)	京丸園視察研修を通して、京丸園の活動をさらに良くするためにどんなことが必要でしょうか？ソーシャルアクションの視点を大切に考えてみてください。(200文字以上)	全体を通して学んだこと、感想も含めて考えてみて下さい。 (200文字以上)
Aさん	今回の視察を通じて、私は農業と福祉の間に立つコーディネーターが酸いも甘いも実情を知り尽くした公平な存在であるべきだということを再認識しました。 その場凌ぎの農福連携では利用者の安心感を得つつ継続して働ける環境を実現することができず、寧ろ時間が流れるにつれて安定感が失われていき雇用の停止や工賃の減額などのリスクが生まれてしまいます。コーディネーターはそういった"いつか生まれる可能性があるリスク"にもしっかりと目を向けた上で将来像を構築し、農福連携に関わる人々の想いや能力の把握・農業と福祉のどちらにも偏らずとも知識は備えている第三者としての視点を中核として農福連携は持続すべき取組であると広く訴えていく役割があると改めて感じました。	私は京丸園での取組は勿論のこと、社長である鈴木さんのユニバーサル農業に対する熱い想いが更に広く周知されていくべきであると実感しました。その対象は農業関係者と福祉関係者に留まらず、企業関係者や医療関係者など、障がい者が活き活きとした社会生活を送るにあたって連携が求められる全ての人々です。 農福連携にスポットライトが当たりつつある今でも、福祉に対する偏見は根深く残っています。その障がい者にとって息が詰まるような環境を障がい者に合わせて変化させるためには、京丸園の存在と共に鈴木さんの言葉が多くの人々の胸に届く必要があると思います。障がい者や福祉関係者は役割を与えられさえすれば、農業をはじめ産業の弱みを工夫によって補う上に結果として良い変化や利益をもたらすことができる。そのことを証明し続けている京丸園によって多くの人々の意識が改革されれば、より障がい者や福祉関係者の活躍の場が広がり社会の中での自己実現が可能になると感じました。	全体を通して、私は知識と視野を広く持つといった基本的なことの重要さを改めて認識しました。福祉側の視点のみでは気づくことができない、鈴木さんの農業・経営側ならではの視点で率直に捉えていた行政の不安定さが見え隠れする立ち回り方や自身が携わっている農業の弱みは私にとっては新鮮に感じ取れました。制度や人間関係のしがらみがない学生の内にこのような経験を積めたことは、非常に有意義であると思っています。 また、視野が狭まってしまえば忘れがちになる、長期にわたって円滑なコミュニケーションを図るための「人をコントロールしようとしない」といった考え方は、農福連携のみならず今後の人生においても心に留めておくべき学びであったと感じます。
Bさん	京丸園の学校のリモート授業の際、農福連携において福祉側に求める事はどういったことがありますか？と聞いた際、福祉側の視点のアドバイスが重要といった事を聞きました。今回の視察でそれについて詳しく聞きたいと思っていたのですが、鈴木さんのお話の中に、農業は福祉施設から障害者の手を借りているが、安い障害者の手を借りれなくなった時農業が働く場として選ばれず、産業としては弱いままになるという話や農業も福祉もマイナス産業(辞めていく人が多い、人手が足らない)で、マイナスにマイナスをただ足すだけではマイナスといった話を聞いて、福祉的な視点でのアドバイスということの難しさについて考えさせられました。福祉目線ごうですよ、というアドバイスも勿論大切な事ですが、最終的にはお互いを強い産業としていくことが目標で、お互いの連携を深め、農業と福祉が選ばれる産業になっていくために考えることがたくさんあるなと思いました。	活動を良くするという意味では、働いている方が利益をさらに得ることが含まれていると思いますが、京丸園では、既に片麻痺の方に合わせた仕事が楽になり、仕事の効率が上がるトレー洗い機が採用されていました。また、作業用具の整理などの環境面の整備も行われていて、このような社会資源を用いて機械を効率的に使用していったり環境面を整備して作業効率を上げていく事が京丸園の活動にとって重要だと思います。また、上記のトレー洗い機では、他のリハビリを専門とする方の意見が取り入れられていて、とても便利な機械が出来ていたため、他職種の意見を取り入れたりなどして、よりよい環境作りができると良くなっていくと思います。	去年は農福連携について学ぶ機会が少なかったこともあり、去年も十分学べたと思っていましたが、今年ではより深い話を聞いたり、見て学ぶことが出来て、とても面白かったです。1番この視察を通して考えさせられたのは、農福連携のゴールについてで、今までは人手が少ない農業に働きたくても場所が少ない障害者の方が働けて良い、ぐらいに思っていたのですがこのままその形態を続けていくにあたっての問題点や未来の農業と福祉についてを今まで考えた事が無かったので、農福連携について理解が深まったと共に、まだたくさん学んでいくことが必要だなと感じました。
Cさん	鈴木さんの話を受け、私たちソーシャルワーカー側だけの意見だけではなく、そこに関わってくる農家さんや障がい者の方など色々な人と連携することで新しい視点が生まれ、且つ私たちの役割を全うできるのではないのかと感じました。また、今ある知識を関わる人と共有し次にどう繋げるのかや、それをできるように試行錯誤し結果として出すにはどうすべきかを考えるべきだと思いました。福祉や農家、両方の視点を見つめ、互いが互いをリスペクトしていくことでより一層ソーシャルワーカーとしての価値が出ると思いました。	仕事現場を見て障がい者の方たちが働く上でのストレスや、一人ひとりに合わせた仕事やスペースを確保するなど、視察を行い今ある福祉に欲しいと思わせるような設備が整っており、今後の参考になる物ばかりでした。京丸園さんは今求める利用者のニーズをしっかり確保し、ユニバーサル農業を体現できており、今回の視察はとても良かったと思た上、京丸園さんは何年も先のことを見据えているのだろうと感じる素晴らしい事を学べたと思います。	今回の視察では、今までになかった新しい視点などを感じる機会になりました。京丸園さんでは一人ひとりにニーズを合わせており、諦めないことが成長に繋がり新しいことへの挑戦に進めるのだということを学べました。色々な人と関わる仕事上、一人だけでの理解だけでは足りない、なので全体が理解し共有することで新しい視点が生まれ社会促進となり、今の状況や場面にあった様々な知識や意見などになるのだと思いました。今回での視察を今後の実習などに活かしていきたいと思いました。
Dさん	学んだ事は、障害者=働けない、仕事が出来ないという考え方を変えていかなければいけない事です。京丸園さんでは、パックに詰める時に小さな種が付いてたらダメ、6パックで1つにする工程があり6まで数えられたらいい。それ以上の数字は無いから。と障害の程度は違えどそれさえ出来れば働くことが出来ると聞き、なるほどなと思いました。私自身、障害のある人達がなかなか働ける場所が無い、雇ってくれないという所が多いのは聞いたことがあるので、どうすれば働けるのか考えたことがありますが、鈴木さんのような考えをした事が無かったので、もっと障害に付いて勉強しなきゃいけないなんてと改めて思いました。 大切にする事は、クライエントの事を第一に考えどうすれば働きやすくなるかを考えることかなと思います。そのためにももっと自分自身勉強しなきゃいけないと思います。	活動自体はものすごく勉強になるし、言うことは何も無いです。でも気になったのは、暑い時期ハウス内での作業や冷房が無い所での長時間の作業は少し大変かなと思います。体力があまりなかったり、暑さなどに弱い方は体調を崩してしまうのではないかと思いました。冷房設備を取り入れるともっとお金がかかってしまうけど、利用者の方々が安心して仕事が出来るためにはそういう設備が必要なのかなと思いました。設備を取り入れることが難しかったら、市販で売ってる首を冷やしたりする物を常備しておくなどやったらいいのかなと思います。	学んだことは、障害者=働けないは違う。農福連携の重要さです。視察の時の話の中で、150万人以上の障害者は働かず家にいるという現状を知り、「働かず」ではなく「働く場所が無い」と言うこと。一般企業で雇ってくれなかったら、農業など産業の方に来て欲しいと言っていて共感しました。今よりももっと産業の場で働ける人、または一般企業でも障害者の方が働けるように考えを改めていかなければならないと思います。 私自身も酪農家であり、年々引き継ぐ人や働く人が居なくて酪農をやめる人も増えています。それもあり農業と福祉の連携はとても大事だと思っています。今回の視察で大変さなど色々知ることが出来ました。農福連携はまだ知らない人も当たり前にいるので、それを私達や学校の活動などでもっと広めていければいいなと思います。

第4項　成果

教育プログラムについて

・「農福連携の実際Ⅰ」では全国において先駆的に農福連携に取り組まれている農業者・福祉事業所・特例子会社などからオンラインでの講義は実際に取り組まれている内容を直接聞く機会となり、理解の向上につながっている。

・フィールドワークでは実際の障害者と関わりながら畑作業や養鶏・野菜販売を通じて農福連携のさまざまな視点から学ぶよい機会となる。

・視察はソーシャルワーカーという立場からどのように農業に関わっていくのか、農福連携とは何かを考えるきっかけとなっている。そして、クラスメイト同士の関係性が深まり、学習に対する意欲が向上する。

今後は3年次のカリキュラム開発の検討をしていく必要がある。

第 4 章　全体の振り返り 時系列に記載

今年度、日経 BP の会議など取り組みにつきまして、時系列に報告する。

<u>・6月28日（金） 16:30～17:30 web 会議</u>

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

～R6第1回ヒアリング（日経 BP）2024.6.28～議事録

【参加者】

文科省：齊藤

日経 BP：高津、高橋

心療校：佐藤学科長　飯島

■議事要旨

１）事業計画概要説明

＜事業計画書の主なポイント＞

西野学園より、今年度の事業計画書の概要について説明いただいた。

・北海道農政部の管轄する認定資格について。今年度より、札幌圏域の実証講座について、8 回中 5 回受講した受講生に対して、農政部、保健福祉部連名での修了証の交付が認められた。最終年度は 30 名への発行を目指す。農政部から広報活動をしていただき、昨年度より受講者数も増加した。今年度の 1 回目は高校生、専門学校生計 20 名に加え、一般の方 10 名程度が参加した。2 回目も同程度。次回は農園での実習となり、人数制限があるため、高校生、専門学校生の参加を優先し、一般の方は数名程度となる見込み。一般の方の参加状況としては、5 回の参加はハードルが高いため、修了証にこだわらず興味のある内容だけ参加したいという方もいる。

・令和 7 年度にオランダ視察を予定しており、今年度中に精査、調整を進める。

＜質疑応答の主な内容＞

●令和 7 年度の海外視察について

事務局――農福連携を学ぶ目的とともに、高専連携の教育プログラムが海外でどう提供されているかという視点からも調査いただきたい。視察内容について、具体的なイメージはあるか。

西野学園――検討中。今年度中に、旅行代理店等と連携して、情報収集を進める。

事務局――一般的に、欧州など海外におけるキャリア教育は、若い年代から職業意識を持たせ、それに合わせて教育を提供する仕組みがあると言われている。農福連携の場において、どのようなプログラムを若い世代に提供しているかという点も念頭に置いて、実態を調査、視察いただきたい。

●高校段階でプログラムを受講したことによる専門学校生の効果検証について

事務局――今年度、実証を実施した高校から、西野学園への入学者はいるか。
西野学園――昨年度受講した高校生の中で今年度入学した人はいない。余市紅志高校では、関心のある生徒はいたが、通学距離等が課題となり入学には結びついていない。札幌大通高校は、昨年度と今年度、2 年連続で受講している生徒もおり、興味関心のある生徒がいることは確かかと思われる。来年度以降、西野学園への入学も期待できるのではないか。
文科省――そのような専門学校生が出てきた場合には、高校段階のプログラム受講経験によって、学生の職業理解やモチベーションなどについて、違いが生じるか検証いただきたい。本取り組みの有効性を対外的に説明ができる定量的、定性的なデータが示せると良いと考えている。

●プログラムの対象学年について
事務局――プログラムに参加する高校生の学年単位の状況をご教示いただきたい。年次に合わせてカリキュラムを変える等のプログラム面、または受講年数（複数年、単年）により関心度の差があるといった、高校生の意識の違いなどはあるか。
西野学園――余市紅志高校は、固定で高校 3 年の一部が対象となる。札幌大通高校は 1 年間の受講により、単位を認めるという形になるため、2 年目以降を受ける必要はない。ただ、今年度は、修了証を交付することになり、2 年目の受講となる生徒が数名いる。
事務局――プログラムの検証という意味では、場合によっては対象学年を広げるというアプローチも検討いただきたい。

●実証授業への参加エリアについて
事務局――北海道全域の学校から、実証授業の参加を募っているのか。
西野学園――行政、企業側については、北海道農政部など、札幌圏域に関わらず、専門家の方に実証を見てもらい、フィードバックをいただいている。
事務局――道内の生徒のオンラインで参加いただく等、プログラムに参加する高校生を増やすことも検討いただけると良いのではないか。
事務局――札幌圏域の実証授業に参加している一般の方は、西野学園の近隣の方か。
西野学園――最も遠い方で、車で 1 時間程度の方もいる。土曜に来校いただく形式となるため、それ以上の遠方の方は難しいと思われる。
事務局――専門家からのフィードバックはもちろんだが、参加者の一般の方から高専連携に関する発信などを促していただくことは可能か。
西野学園――これまでの参加者のうち、大学の先生で子どもと参加された方や、他の福祉系の大学の学生などもいる。この方々は、コンソーシアムの構成員からの宣伝により参加いただいており、一般の方からの発信にも広げていきたいという意識はある。ただし、会場のキャパシティやリソースの問題がある。高校生、専門学校生を主として、その他の方

は対応できる範囲内で参加いただく形としたい。
事務局――承知した。地域の方を巻き込んで取り組みを進められている点は、積極的に発信、共有いただきたい。事業終了後の持続可能性を考えると、一般の方にも関心を広めることは重要と考える。

２）今年度の事業スケジュールについて（事務局・文部科学省：詳細資料参照）
＜事務局＞各種会議、オンラインセミナー、調査等について
・セミナー：R7 年 1 月 15 日～17 日午後の予定。決まり次第日程調整を依頼する。
・調査：受託団体様の連携先（高校、専門学校）を対象に調査を依頼することを検討中。詳細は別途連絡。
＜文部科学省＞本年度の事業執行スケジュールについて
・大きな変更点は 1 点。次年度の事業計画書は昨年度より後ろ倒し、2/3(月)を予定。
・12 月末(12/23)の中間報告、3 月初め(3/3)の最終報告は変更なし。詳細は 1 か月前をめどに案内する。

３）その他（事務局）
・視察のお願い：可能であれば、実証授業や勉強会などの視察を行いたいと考えているので、支障がないものについてはスケジュールの共有をお願いしたい。
・議事概要：昨年度の内容より簡素化したもの（A4-2 ページ程度）を作成、会議終了後 1 カ月以内を目途に確認をお願いすることになる。
（以上）

<u>・11月25日(月)web 会議</u>
「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
～R6第 2 回ヒアリング(日経 BP)2024.11.25～議事録
【参加者】
文科省:大塩　齊藤
日経 BP:高津、高橋
心療校:佐藤学科長　飯島

■議題
1)令和 6 年度事業進捗について(西野学園)
2)各種組織・団体の連携状況について(現状と今後)(西野学園)
3)今年度の事業スケジュールについて(事務局・文部科学省)
4)その他(事務局からの連絡事項など)

■議事要旨

1）令和 6 年度事業進捗説明

西野学園より、今年度の事業進捗について説明いただいた。

＜主なポイント＞

・今年度の実証のうち、余市紅志高校との連携授業は完了。事業開始時から同じ枠組みで実施しており、来年度以降も継続する。札幌圏域の実証授業については残り 1 回の実施を 12 月に予定しており、計 8 回の授業を行う。

・社会福祉士の周知のための取り組みについて、余市紅志高校の実証授業では高校 3 年生に対して、専門学校教員による講義を通じて社会福祉士を含むソーシャルワーカーの仕事について周知した。すでに進路が決まっている生徒が多かったものの、仕事内容等は適宜伝えられたと認識している。余市紅志高校の場合、例年、介護福祉士を目指す生徒が 1 名程度いる。直近でも西野学園（札幌医学技術福祉歯科専門学校）の介護福祉士科の OC に来た生徒がいたが、最終的には別の学校に進学を決めた。このほかに、介護福祉士として就職した卒業生が 1 名いる。

・高校段階からの学習習慣を定着させるための取り組みについて、余市紅志高校との連携授業において高校生を専門学校に招き、授業を受けてもらった。専門学校科目と高校科目で連携し、平日に高校生が専門学校に来る形式となる。午前 2 コマ、午後 2 コマの計 4 コマ。専門学校 3 年生が授業に入り、高校生へのアドバイスや学生間の質疑応答を行った。学習習慣の定着までつながったかは不明確だが、大学や専門学校に進学した場合にどのような勉強をするのかといった具体的なイメージを持ってもらう機会となった。

・福祉的な視点での農業経営に関わる人材育成についての視察および事業の開発については、昨年度は長野県カゴメ野菜生活ファームで栽培～加工まで視察を行った。今年度は、実際に農福連携を行っている現場の視察として、静岡県の京丸園を訪問した。参加した学生は、農福連携ソーシャルワークコース 2 年生の 4 名。昨年の視察にも参加している。1 年生にも周知はしたが、コースの希望者が現状いないため、参加はなし。参加学生は、視察前に取り組み状況や特徴についてのオンライン講義を受けたうえで、8 月に現地を訪問した。農福連携の取組の状況や実際の農作物、工夫している障がい者向けの工具等を見ることで、講義だけではわからない気づきを得られる機会となった。学生からの満足度は高かった。昨年度に続き 2 年目となり、1 年生から学んできた成果として、用語を含めた理解力が高まり、農業者との意思疎通がスムーズにできるようになったことが挙げられる。農家の福祉的な連携として、PT や OT との横連携により福祉とつながっているということも視察によって分かった点である。視察を通じて、農福連携に対する視野が広がっている。

・教員による小林クリエイト社の視察は延期となった。

＜質疑応答の主な内容＞

●来年度の海外視察計画について

文科省――来年度の計画として、オランダの視察を予定しているとのことだったが、訪問先などの

検討は進んでいるか。
西野学園――現在旅行代理店と調整中となる。視察は世界園芸センター、ケアファームは予定が決まっている。教育プログラム、キャリアアップの取り組み視察（教育機関）は依頼を進めており、回答待ちの状況。視察時期を 8 月予定としており、学校関係は夏休みのため、対応が難しいかもしれないとのこと。視察先は専門学校と同じ形の学校を想定している。
文科省――視察先の選定基準、理由はあるか。
西野学園――業者に依頼し、農福連携に取り組んでいるところを 5～6 か所候補として選んでもらった。また、道内で農福連携を推進している先から情報を得て、世界園芸センターへの視察を決めた。ケアファームは、今年度視察に行った京丸園からも勧められた。
文科省――海外視察は国内の場合と事務処理が変わるため、計画段階でも事前に相談してほしい。

●専門学校生における高校段階のプログラム受講有無による意識の差などの検証について
文科省――連携高校から西野学園へ入学する例は少ないかと思われるが、高校段階でのプログラム受講による効果などの検証について、検討されているか。
西野学園――高校とも協議はしているが、なかなか進んでいない。余市紅志高校の場合、3 年生 20 名程度のうち、11 名に実証へ参加いただいている。そのうち就職が 8 名、進学が 3 名。進学 3 名のうち 1 名が介護関係、2 名は別分野となる。
文科省――就職後の追跡調査は難しいか。
西野学園――地元の一般企業に勤める生徒がほとんどのため、追跡調査は厳しいと思われる。
事務局――以前、連携高校の校長先生より、本事業を通じて地元就職者を増やしたいという意見があったかと思う。実証授業での参加を経て、介護福祉業界にかぎらず、地元就職に対する意識の変化（地元就職を志向した生徒の人数等）という観点も一つの指標になるのではないか。
西野学園――高校 3 年進級時の進路希望と実績は高校に確認すればわかると思われるので、連携校に依頼しデータを集めることを検討したい。

2）各種組織・団体の連携状況について
西野学園より、委員会に参画している各機関の状況について説明いただいた。
＜主なポイント＞
・行政機関のうち、教育関係は北海道教育庁に参画いただき、コンソーシアム会議の中で授業のあり方についてアドバイスをいただいている。産業関連は、北海道農政部、保健福祉部からの協賛という形で資格修了証を発行しているため、8 回の連携授業の出席者、出席率、授業内容については適宜報告している。農政部からの連携授業の周知も進めていただいている。
・農福連携カリキュラムにおいては、現状の企業等の連携先で十分と考えているが、来年度の授業では、北海道の農業に関して JA 等から講義いただく計画を立てている。コンソーシアムへの参画というよりは、授業における支援先、協力先としての連携となる。

・令和 9 年度以降、今年スタートした資格認定の仕組みは継続したいという考えを持っているが、修了証発行のための授業（計 8 回）を実施するためには財源の問題が出てくるため、授業回数は課題となる。可能であれば、高校生だけではなく一般の方も参加いただける形を継続し、財源も含め、今後、北海道農政部に相談する。
・余市紅志高校との連携については、移動や財源の負荷はあるため検討が必要だが、違う形になるかもしれないが専門学校からの出前授業は継続できればと考えている。
・これまでの実証授業の中で、農福連携に関わる多くの方に協力いただいており、道内での見学先には無償で協力いただいている。授業に協力いただく方については、西野学園で非常勤講師の登録を進めるという方法も念頭に置いている。

3）今年度の事業スケジュールについて（事務局・文部科学省：詳細資料参照）
＜事務局＞各種会議、オンラインセミナー、調査等について
・ヒアリング：第 3 回は、要望があれば個別に開催とする。必要があれば相談いただきたい。
・合同会議：2 月上旬の設定で検討。持続可能な高専接続事業をテーマとする。
・セミナー： 1 月 15 日～17 日。それぞれ 16:00～18:00。登壇時間は全団体のヒアリング終了後調整し依頼する。
・調査：別途依頼する。

※1 月 15 日が西野学園全体の会議研修があるため、参加不可。16 日、17 日の午後であれば問題なし。再調整。

＜文部科学省＞本年度の事業執行スケジュールについて
・実績中間報告、来年度事業計画書、最終実績報告書、提出締切が 3 段階に分かれる。

（以上）

・1月17日（金） 16:00-18:00 web セミナー
テーマ：「専門学校と高校を接続し中核的人材育成」
主 催：日経 BP
地域活性化のための農福連携人材育成事業の趣旨・目的と実際に取り組んでいる高等学校等と専門学校の連携授業について発表する。

・2月8日（土） 10:00～11:00

「農福連携入門講座修了証　授与式」

場　所　札幌心療福祉専門学校

共　催：北海道農政部・北海道保健福祉部・学校法人西野学園

参加者：修了者18名のうち14名が参加

令和6年度農福連携入門講座において修了証交付の条件を満たした受講生を対象に修了証を授与する。また、令和6年度農福連携入門講座の振り返りと意見交換会を実施する。

第 5 章　まとめ

本学における実証研究の大きな二つの柱である「北海道余市紅志高校との連携」「札幌圏域連携授業（札幌大通高校との連携を中心とする）のそれぞれについて、連携内容、連携方法の違いを明らかにし、他の専修学校が参考・活用に資するものとしたい。

1　北海道余市紅志高校との連携内容・連携方法

余市紅志高校との連携スタイルは「高校の正規のカリキュラムとして行われる授業に専門学校の学生と教員が参加しともに学ぶ」というものである。専門学校と高校の接続が多くの場合「出前授業」スタイルで行われる。この「出前授業」は高校の「総合的探究の時間」で実施される。年間約 35 時間の「探究学習」の中で「キャリア教育」（職業を知る）として「出前授業」が行われることが通常である。出前授業は専門学校の教員と高校の教員間にそれほど多くの打合せを必要とせず、高校側にとっては大変実施しやすい授業形態である。

本学と余市紅志高校の場合は単発的な授業ではなく、年間で 35 時間実施予定の「地域園芸」という授業に 10 回参加し高校生と専門学校生が共同で学びあうというものである。高校の通年の授業に定期的継続的に他の学校の学生が参加するにあたり、その準備には非常の多くの時間と労力が必要だった。「地域園芸」という科目が実施される曜日と時間が決まるのが前年度の 2～3 月頃である。その曜日と時間に合わせて専門学校のカリキュラムが決まっていく。言い換えるならば、地域園芸の曜日時間が決まるまで専門学校のカリキュラムは何一つ決まらない。また、その地域園芸を担当する教員が決まるのもほぼ同時期である。「誰が何をどのように教えるか」という教育内容にかかわる打合せには非常に多くの時間を要し、特に 2～4 月という学校の多忙期に校内ではなく校外と打ち合わせをするのは本学だけでなく、高校側にとって大変な労力であったと想像するに難くない。この連携授業が成功するか否かの最大のポイントはこの「準備期間中の両校間の打合せ」にあるといえる。「誰が何をどのように教えるのか」「授業の到達目標はどこに置くのか」「それぞれの教員の役割は何か」を明確にすることで異校種である教員間の連携が円滑なものになった。

本学と余市紅志高校との連携授業は「定期的継続的連携授業」という稀有な形態であったが、それを成功に導いたのは紛れもなく高校側の連携授業に対する理解と協力である。高校側が専門学校生と高校生がともに学ぶことに意義を認め、私たちを快く受け入れてくれる心的受容があったからこそ私たちは高校生とともに高校で学ぶことができた。余市紅志高校には感謝の言葉しか見つからない。高専接続を継続的に行うには高校側の理解と協力が絶対に欠かせないものである。

2　札幌大通高校との連携内容・連携方法

札幌大通高校を中心とした「札幌圏域連携授業」は年8回、土曜日に実施している。今年度、この連携授業には大通高校の生徒のほか特別支援学校の生徒、高校生、大学生、社会人も参加している。当初は、専門学校生と高校生を対象にした連携だったが今年度は北海道農政部・保健

福祉部から「農福入門講座」と認定されたため社会人の参加が増えた。連携授業の目的は「農福連携とは何か？」を学ぶことであり、毎回、その分野の専門家を講師に招き授業を展開している。「農福連携はお互いのコミュニケーションから」と捉え、一回目の授業は演出家を講師に招きコミュニケーションスキルを学んだ。2回目以降は農福連携を行っている農場を訪れ農場実習や、野菜の仕入れ販売実習としてのマルシェ、（マルシェの前にはマーケティングの学習）、農福商工連携としてレストランのシェフから調理の講義・実習指導など農福連携の様々な形を学んでいる。

この連携授業の難しさは「農福連携のそれぞれの分野の専門家を見つけ私たちの目的とする授業を理解してもらい、それを実践してもらう」という一連の流れにある。札幌圏域連携授業を始めるにあたり、コーディネーターと教員が話し合い年間8回の授業を体系的に組み立て、（例えばマーケティング→仕入れ→価格決定→ディスプレイ→販売）、それぞれの回での授業内容を決定していく。講師の人選はコーディネーターのネットワークが絶大な力を発揮する。コーディネーターがいなければこの連携スタイルは実現不能であろう。それほどまでにコーディネーターの存在は大きいものである。コーディネーターから紹介された講師に教員が授業の目的を伝え、教員と講師が話し合いながら授業内容を構築していくというスタイルである。実際の授業の場面では、教員も授業に参加しグループ分けを手伝うなどしている。教員も一緒に参加することで講師も安心して授業を進められると考えている。授業後は参加者にアンケートを実施し、その結果は講師にもお伝えしている。

連携先の大通高校の特徴にも言及が必要である。大通高校は全国でも珍しい「三部制・単位制・定時制」の学校で新しい形の高校として注目を集めている。「社会の力を借りて高校生を育てていく」をスローガンにし、この連携授業を高校側が「学校外学習での単位」として認めてくれたため高校生の参加が促進された。このような単位認定は稀なことである。また、大通高校の教員が生徒と一緒に授業に参加してくれることも大変ありがたい。高校側に本学の教育内容が認められたのだと評価したい。

3　まとめ

以上のように本学では全く違うタイプの連携授業を同時に行っている。そのそれぞれに意義と優れた教育内容がありどちらが良い、というものではない。幸い本学は余市紅志高校、札幌大通高校と良い連携授業を実践することができたが、それは高校側の理解と協力があったからに他ならない。あらためて感謝の意を表したい。この連携授業の成果として示すことができるのは参加者のアンケートだと考える。アンケート結果はこの報告書の他のページを参照していただきたい。どの参加者も「連携授業での学びは有意義だった」と捉えているのが、連携授業への評価である。

これらを本学のホームページに掲載し、成果として対外的に発信していくことを予定している。

本学の取組が他の専修学校の参考になれば幸甚である。

【添付資料】

受講後のアンケートのお願い

今回の実証講座の受講ありがとうございます。今回の講座について下記の質問にご回答をお願いします。

1　講義の内容について当てはまるものを選んでください。 *

- 十分理解できるものであった。
- 理解できるものであった。
- 少し理解できるものであった。
- 理解できないものであった。

2　講師の進め方について当てはまるものを選んでください。 *

- 大変、満足した。
- 満足した。
- 普通。
- 満足するものではなかった。

3　資料の内容について当てはまるものを選んでください。 *

- 十分に理解できるものであった。
- 理解できるものであった。
- 少し、理解できるものであった。
- 理解できないものであった。

4　講義の時間の長さについて当てはまるものを選んでください。*

- ちょうど良い時間であった。
- 少し、長く感じた。
- 少し、短く感じた

5　実証講座を受ける前と比べて知識レベルの変化について当てはまるものを選んでください。*

- 知識レベルが非常に向上した。
- 知識レベルが向上した。
- 知識レベルが少し、向上した。
- 知識レベルは受講前と変わらない。

6　実証講座を受講して意見・感想などの記載をお願いいたします。*

短文回答

2024京丸園視察研修に参加して（アンケート）

自由記述もいっぱい書いてくれたら嬉しいです。

氏名 *

短文回答

学籍番号 *

短文回答

京丸園視察研修は満足しましたか？ *

- 大変満足した。
- 満足した。
- 満足していない。
- どれともいえない

ランチ交流は満足しましたか？ *

- 大変満足した。
- 満足した。
- 満足していない。
- どれともいえない

今回の視察体験のスケジュール感はどうでしたか？ *

- ちょうどよい
- 詰め込みすぎである
- もっと体験したい

全部の視察・体験をしての満足感はどうでしたか？ *

- 大変満足した。
- 満足した。
- 満足していない。
- どれともいえない

今回の視察全体と通しての感想やもっとこうして欲しい等の改善点について教えて下さい。 *

2024京丸園視察研修のレポート

提出期限は8月30日（金）です。夏休みの宿題と思ってください。キーワードは、「水耕栽培、6次産業、細分化、担い手不足、就労支援、生きがいづくり、地域連携づくり、農福連携、ストレングス、ソーシャルアクション、仲間づくり、憩いの場所辺りでしょうか？」ファイトー

氏名 *

短文回答

学籍番号 *

短文回答

京丸園視察研修を通して学んだことはなんですか？ソーシャルワーカーとして大切にするべき視点や価値等について考えてみて下さい。（200文字以上） *

長文回答

京丸園視察研修を通して、京丸園の活動をさらに良くするためにどんなことが必要でしょうか？ソーシャルアクションの視点を大切に考えてみてください。（200文字以上） *

長文回答

全体を通して学んだこと、感想も含めて考えてみて下さい。 *
（200文字以上）

長文回答

令和６年度文部科学省委託事業　専修学校による地域産業中核的人材養成事業
専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証
地域活性化のための農福連携人材育成事業

令和６年度　成果報告書

令和７年３月１日

学校法人西野学園（札幌心療福祉専門学校）
〒064-0822　北海道札幌市中央区北２条20丁目2-28
TEL:011-643-8241　　FAX:011-643-8292